敷島町文化財調査報告書　第26集
（山　梨　県）

松ノ尾遺跡 II

宅地造成工事に伴う
古墳時代・奈良時代・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004
敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

『松ノ尾遺跡 Ⅱ』敷島町文化財調査報告書 第26集 正誤表

頁・行	誤		正
P4の7行目	、古墳時代8軒、奈良時代3軒、平安時代9軒、	⇒	、古墳時代9軒、奈良時代3軒、平安時代8軒、
P38の2行目	1. 旧河道跡(第3・35～39図、第31～34表、図版1・10)	⇒	1. 旧河道跡(第3・35～40図、第31～35表、図版1・10・11)
P38の12行目	代表的なものを第35～39図に掲載した。	⇒	代表的なものを第35～40図に掲載した。
P44の1行目	2. 谷状の落ち込み(第3・40～43図、第35～37表、	⇒	2. 谷状の落ち込み(第3・41～44図、第36～38表、
P48の1行目	3. その他の遺構外遺物(第44～52図、第38～41表、図版11～13)	⇒	3. その他の遺構外遺物(第45～51図、第39～41表、図版12・13)
P67の3行目	磨面部と脚部(第43図－25、第49図－60・61)	⇒	磨面部と脚部(第44図－25、第50図－60・61)
同上	脚部(第43図－25)	⇒	脚部(第44図－25)
P67の30～31行目	灰釉陶器皿(旧河道跡№24)の	⇒	灰釉陶器皿(谷状の落ち込み№24)の
P68の1行目	男瓦(遺構外№89)は、	⇒	男瓦(旧河道跡№61)は、
P68の4行目	男瓦(遺構外№62)はB－7グリッド、	⇒	男瓦(旧河道跡№62)はB－5グリッド、
同上	女瓦(遺構外№63)はB－5グリッドから	⇒	女瓦(旧河道跡№63)はB－7グリッドから
図版11の上段左	谷－61・63(表)	⇒	河－61・63(表)
図版11の上段右	谷－61・63(裏)	⇒	河－61・63(裏)

敷島町教育委員会　平成16年8月末日現在

敷島町文化財調査報告書　第26集
（山　梨　県）

松ノ尾遺跡 II

宅地造成工事に伴う
古墳時代・奈良時代・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004
敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会

1．緑釉陶器と貿易陶磁器（白磁ＸⅠ・Ⅱ類、青磁）

2．瓦、円面硯、多面を有する高坏、腰帯（鈸具）

序　　文

敷島町の南部は荒川によって形成された扇状地形がひろがっており、平成５年の『遺跡詳細分布調査』では、数多くの遺跡がこの地形上に分布していることが明らかとなりました。

遺跡の多いこの扇状地上では、近年開発が頻繁におこなわれ、緊急となる埋蔵文化財の保護を目的とした発掘調査がおこなわれてきております。

中でも、中下条と大下条に所在している松ノ尾遺跡では、道路建設、宅地分譲、大型店舗などの開発が数多く、これらの開発に伴う調査が重ねられてきております。その結果、古くは縄文時代（4,500年前）から中世（約500年前）にかけて頻繁に人々が暮していた痕跡が発見されています。中でも、今からおよそ1,300年前の古墳時代後期から約1,000年前の平安時代では大きな集落跡を形成していることが近年徐々に明らかとなってきています。

今回報告する第Ⅱ次調査は、宅地造成に伴う記録保存のための調査となりましたが、弥生時代の住居跡１軒、古墳時代の住居跡８軒、奈良時代の住居跡３軒、平安時代の住居跡９軒などが発見され、長い期間にわたり当時の人々が生活をおこなっていたことが明らかとなりました。

今後も、町の財産である文化財についてなお一層の精密な調査と記録を行い、地域文化の歴史解明とその発展のため後世に伝え、さらに教育普及へと役立てていくよう努めてまいります。

最後に、このたびの調査に際し、地権者の方々の文化財保護に対するご理解とご協力のもとで、調査の成果を上げることができましたことに深く感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年８月

敷島町教育委員会

教育長　山　口　正　智

例　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条地区に所在する松ノ尾遺跡の発掘報告書である。

2．本調査は、宅地造成に伴い実施した発掘調査で、調査面積は約2,000㎡である。

3．発掘調査は、平成10年（1998年）４月２日～９月30日までの約６ヶ月間にわたって行った。
その後、整理作業は、断続的に行った。

4．発掘調査および整理作業にあたった組織は、次のとおりである。

調査指導・主管　敷島町教育委員会
調査主体者　敷島町文化財調査会
調査指導担当者　≪発掘調査・整理調査≫大嶌正之（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査）
≪整理調査≫　小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）
調査事務局　敷島町文化財調査会

5．発掘作業は大嶌が調査指導を担当し、整理作業は大嶌・小坂の指示のもと、飯室久美恵、石川弘美、一ノ瀬一浩、長田由美子、小林明美、関本芳子、高添美智子、望月典子でおこなった。本報告書中、遺跡全景および遺構写真は大嶌が撮影し、遺物写真の撮影および図版の編集は小坂が行った。最終校正を大嶌が担当した。

6．調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々より御教示をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。

小野正敏（国立歴史博物館）、中込司郎、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畑　大介（敷島町文化財審議会）、斎藤孝正（文化庁美術工芸課）、百瀬正恒（京都市文化財研究所）、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、八重樫忠郎（平泉町教育委員会）、大庭康時（福岡市教育委員会）、萩原三雄、平野修、櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）、山下孝司、閏間俊明（韮崎市教育委員会）

7．発掘調査ならびに整理作業参加者

青山創子、浅川松子、飯室久美恵、石川弘美、一ノ瀬一浩、長田由美子、尾沢玉枝、小林明美、三枝延子、末松福江、須長愛子、関本芳子、高添美智子、近浦正治、保坂広昭、保延　勇、望月典子

8．本遺跡の出土遺物および調査で得られたすべての記録については一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡　例

1．本書の第1図は国土地理院発行の地形図（1：25,000）「甲府市北部」「韮崎」「甲府」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。

2．遺物挿図中、断面が白抜きは土器・土師器・土師質土器で、▓は須恵器、▨は陶器類、□は磁器である。また、▒は焼土範囲を表記する。

3．図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本 文 目 次

序文
例言・凡例
第1章　遺跡をとりまく環境
　1．遺跡の立地と環境 …… 1
　2．松ノ尾遺跡について …… 1
第2章　遺構と遺物
　1．住居跡と遺物
　　a．弥生時代 …… 4
　　b．古墳時代 …… 5
　　c．奈良時代 …… 16
　　d．平安時代 …… 19
　　e．時期不明 …… 26
　2．掘立柱建物跡 …… 32
　3．土　　坑 …… 33
　4．溝状遺構 …… 35
　5．ピ　ッ　ト …… 37
第3章　遺構外出土遺物
　1．旧河道跡 …… 38
　2．谷状の落ち込み …… 44
　3．その他の遺構外遺物 …… 48
第4章　松ノ尾遺跡出土の瓦の胎土分析 …… 62
第5章　まとめ …… 65

挿 図 目 次

第1図　松ノ尾遺跡と周辺の遺跡 …… 2
第2図　調査区位置図 …… 3
第3図　第Ⅱ次調査区遺構分布図 …… 3
第4図　10号住居跡・出土遺物 …… 4
第5図　4号住居跡（1） …… 5
第6図　4号住居跡出土遺物（2） …… 6
第7図　7号住居跡・出土遺物 …… 7
第8図　11号住居跡・出土遺物 …… 8
第9図　12号住居跡・出土遺物 …… 9
第10図　15号住居跡・出土遺物 …… 10
第11図　17号住居跡・出土遺物 …… 11
第12図　18号住居跡・出土遺物（1） …… 12
第13図　18号住居跡出土遺物（2） …… 13
第14図　20号住居跡・出土遺物 …… 14
第15図　22号住居跡・出土遺物 …… 15
第16図　8号住居跡・出土遺物 …… 17
第17図　16号住居跡・出土遺物 …… 18
第18図　19号住居跡・出土遺物 …… 18
第19図　1号住居跡・出土遺物 …… 19
第20図　2号住居跡・出土遺物 …… 20
第21図　3号住居跡・出土遺物 …… 20
第22図　5号住居跡・出土遺物 …… 21
第23図　6号住居跡・出土遺物 …… 21
第24図　9号住居跡・出土遺物（1） …… 22
第25図　9号住居跡出土遺物（2） …… 23
第26図　13号住居跡・出土遺物 …… 24
第27図　21号住居跡・出土遺物 …… 25
第28図　14号住居跡・出土遺物 …… 26
第29図　掘立柱建物跡 …… 32
第30図　1～13号土坑 …… 33
第31・32図　9・12号土坑出土遺物 …… 34
第33図　1～6号溝状遺構・出土遺物 …… 36
第34図　25号ピット・出土遺物 …… 37
第35図　旧河道跡出土遺物分布図 …… 38
第36図　旧河道跡出土遺物（1） …… 39
第37図　旧河道跡出土遺物（2） …… 40
第38図　旧河道跡出土遺物（3） …… 41
第39図　旧河道跡出土遺物（4） …… 42
第40図　旧河道跡出土遺物（5） …… 43
第41図　谷状の落ち込み遺物分布図 …… 44
第42図　谷状の落ち込み出土遺物（1） …… 45
第43図　谷状の落ち込み出土遺物（2） …… 46
第44図　谷状の落ち込み出土遺物（3） …… 47
第45図　遺構外遺物分布図 …… 48
第46図　遺構外出土遺物（1） …… 49
第47図　遺構外出土遺物（2） …… 50

第48図　遺構外出土遺物（3）……51
第49図　遺構外出土遺物（4）……52
第50図　遺構外出土遺物（5）……53
第51図　遺構外出土遺物（6）……54
第52図　松ノ尾遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区概要図　……66
第53図　松ノ尾遺跡第Ⅰ次調査出土参考資料　……66

表　目　次

第1表　1号住居跡出土遺物観察表　……26
第2表　2号住居跡出土遺物観察表　……26
第3表　3号住居跡出土遺物観察表　……27
第4表　4号住居跡出土遺物観察表　……27
第5表　5号住居跡出土遺物観察表　……27
第6表　6号住居跡出土遺物観察表　……27
第7表　7号住居跡出土遺物観察表　……27
第8表　8号住居跡出土遺物観察表　……28
第9表　9号住居跡出土遺物観察表　……28
第10表　10号住居跡出土遺物観察表　……29
第11表　11号住居跡出土遺物観察表　……29
第12表　12号住居跡出土遺物観察表　……29
第13表　13号住居跡出土遺物観察表　……29
第14表　14号住居跡出土遺物観察表　……29
第15表　15号住居跡出土遺物観察表　……30
第16表　16号住居跡出土遺物観察表　……30
第17表　17号住居跡出土遺物観察表　……30
第18表　18号住居跡出土遺物観察表　……30
第19表　19号住居跡出土遺物観察表　……31
第20表　20号住居跡出土遺物観察表　……31
第21表　21号住居跡出土遺物観察表　……31
第22表　22号住居跡出土遺物観察表　……31
第23表　掘立柱建物跡　……32
第24表　土坑一覧　……35
第25表　9号土坑出土遺物観察表　……35
第26表　12号土坑出土遺物観察表　……35
第27表　溝状遺構一覧　……37
第28表　2号溝状遺構出土遺物観察表　……37
第29表　5号溝状遺構出土遺物観察表　……37
第30表　25号ピット出土遺物観察表　……37
第31表　旧河道跡出土土器観察表　……55
第32表　旧河道跡出土の土製品　……56
第33表　旧河道跡出土の石製品　……56
第34表　旧河道跡出土の石器　……56
第35表　旧河道跡出土の瓦　……57
第36表　谷状の落ち込み出土遺物　……57
第37表　谷状の落ち込み出土土製品　……58
第38表　谷状の落ち込み出土石品　……58
第39表　遺構外出土遺物　……58
第40表　遺構外出土の土製品　……61
第41表　遺構外出土の石器　……61

図　版　目　次

図版1－1　調査区全景
図版2－1　10号住居跡
図版2－2　10号住居跡貯蔵穴
図版2－3　4号住居跡
図版2－4　7号住居跡
図版2－5　11号住居跡
図版2－6　12号住居跡
図版2－7　18号住居跡
図版2－8　18号住居跡カマド
図版3－1　15号住居跡
図版3－2　20号住居跡
図版3－3　22号住居跡カマド
図版3－4　16号住居跡
図版3－5　8号住居跡
図版3－6　8号住居跡カマド
図版3－7　19号住居跡
図版3－8　1号住居跡
図版4－1　2号住居跡
図版4－2　3号住居跡
図版4－3　5号住居跡
図版4－4　6号住居跡
図版4－5　9号住居跡
図版4－6　9号住居跡カマド
図版4－7　13号住居跡
図版4－8　14号住居跡
図版5－1　掘立柱建物跡
図版5－2　25号ピット内出土遺物
図版5－3　1号土坑
図版5－4　2号土坑
図版5－5　3号土坑
図版5－6　5号土坑
図版5－7　6号土坑
図版5－8　9号土坑
図版5－9　10号土坑
図版5－10　11号土坑
図版5－11　12号土坑
図版6－1　13号土坑
図版6－2　4号土坑
図版6－3　9号土坑
図版6－4　1号溝状遺構
図版6－5　2号溝状遺構
図版6－6　3号溝状遺構
図版6－7　4号溝状遺構
図版6－8　5号溝状遺構
図版6－9　6号溝状遺構
図版7　遺構内出土遺物（1）
図版8　遺構内出土遺物（2）
図版9　遺構内出土遺物（3）
図版10　遺構内出土遺物（4）・河跡出土遺物
図版11　谷状遺構出土遺物・遺構外出土遺物（1）
図版12　遺構外出土遺物（2）
図版13　遺構外出土遺物（3）
図版14　墨書・線刻土器

第１章　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地と環境（第１図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側へと目を転じ千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約17㎞、東西約４㎞と南北に細長い町である。本町は大きく北部の山岳山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ８～９割は標高1,704ｍを測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

２．松ノ尾遺跡について（第１・２図）

松ノ尾遺跡は、荒川によってできた扇状地上に位置する。敷島町の南部に広がるこの扇状地には、北から南へと向かって大きく東西に２筋の微高地が形成されており、松ノ尾遺跡はちょうど東側の微高地上に占地する。

現在、松ノ尾遺跡として包蔵地認定されている範囲は南北約700ｍ、東西約400ｍの広がりをもち、標高286～296ｍを測り北から南へと向かって緩やかに傾斜した地形を成している。

本遺跡は、遺跡のほぼ中央を横断する都市計画街路愛宕町下条線建設事業に伴い1994年に初めて本格的な発掘調査が実施された。第Ⅰ次調査は1994年10月から翌年３月までおこなわれ、調査面積は約7,000㎡に及んだ。

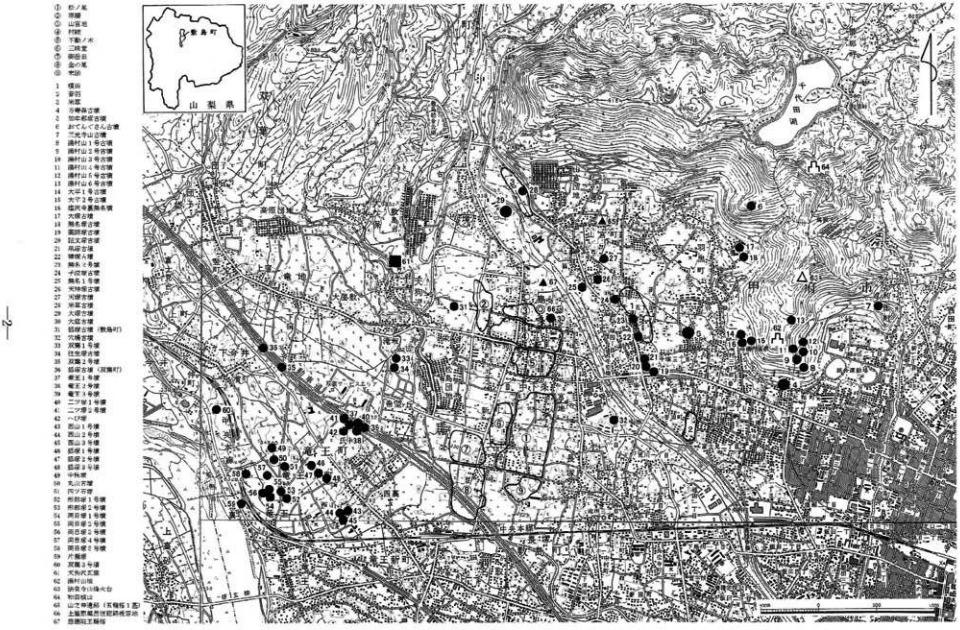
この調査の結果、古墳時代後期（６世紀後半～７世紀）の住居跡５軒、平安時代（10世紀前半～11世紀末葉）の住居跡14軒、方形竪穴状遺構７基、土坑43基、溝状遺構５条、ピットなどからなる集落跡が発見された。

出土した遺物をみると、包含層からは滑石製勾玉、ガラス製小玉、切子玉、臼玉、銅鏃、鉄鏃、刀子など古墳の副葬品と思われるようなものがあり、また甲斐型土器や金色雲母を多量に含んだ土師質土器などをはじめとする膨大な量の土器類や、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶磁器類、また鍛冶関連遺物や多くの鉄・銅製品類なども出土している。

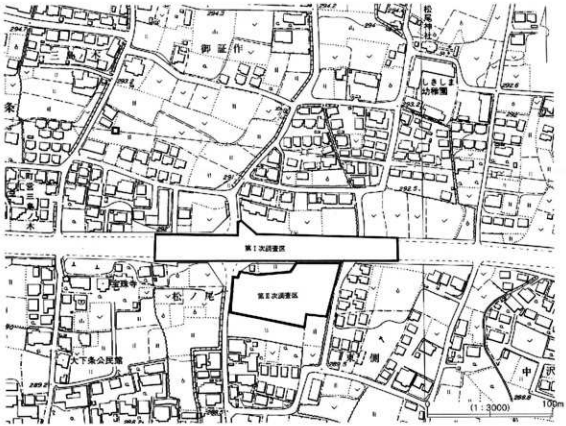
中でも土器・陶磁器類では円面硯、緑釉陶器の碗・皿・稜碗（陰刻花紋９片以上）、土師質土器には小埦、見込みに花弁状暗文を施した脚高高台坏や坏などのほか、貿易陶磁器には白磁（碗・皿・壺・水注など）や青磁（碗・皿）の特筆されるものがある。金属製品は帯金具（鉄製鉸具や銅製蛇尾具）や金銅製小仏像２軀、銅製連鐶壺金具などがあるほか、銅鏡の口縁部片や銅鏡の紐孔部分を中心とした破片も出ている。金銅製小仏像は出土状態や共伴遺物、文様・鋳造技術から11～12世紀の所産とみられる。

今回報告する第Ⅱ次調査は、上記の第Ⅰ次調査区の南に隣接した調査であったが、弥生時代末葉から古墳時代初頭に相当する住居跡や、古墳時代後期（６世紀後半以降）から平安時代（11世紀末葉）にかけての住居跡など多くの遺構が発見され、本遺跡が長期にわたる大規模な集落跡であったことが具体的となった。

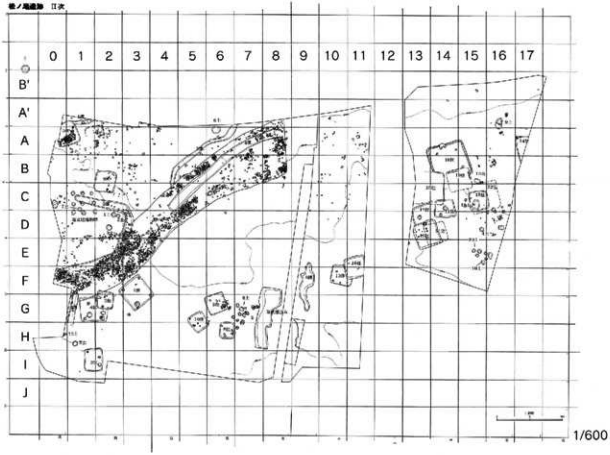
現在では、本遺跡の調査も第Ⅻ次を数えるまでになってきているが、さらに数多くの新たな調査成果が蓄積されてきており、本遺跡の全体像や時代ごとの性格などが徐々に把握されつつある。



第１図　松ノ尾遺跡と周辺の遺跡



第２図　調査区位置図



第３図　第Ⅱ次調査区遺構分布図

第２章　遺構と遺物

今回の調査は松ノ尾遺跡の第Ⅱ次調査である。調査は、1994～95年にかけておこなわれた第Ⅰ次調査の東側南部に隣接した約2,000㎡を対象としておこなわれた（第１～３図）。その結果、住居跡22軒、土坑13基、溝状遺構５基、ピット25基におよぶ数多くの遺構と遺物が確認された。以下、各遺構についてみていくこととする。

１．住居跡

発見された22軒の住居跡についての内訳は、弥生時代末１軒、古墳時代８軒、奈良時代３軒、平安時代９軒、時期不明１軒である。

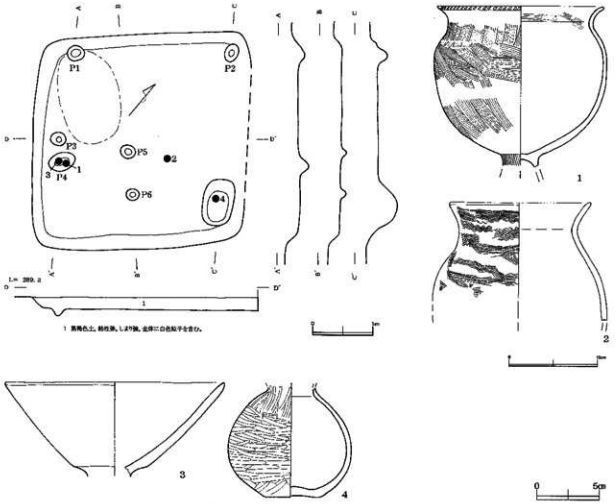
ａ．弥生時代

10号住居跡（第４図、第10表、図版２・７）

位置・概要　調査区内の中央南部からやや西側のG・H－５・６グリッドに位置し、８・９号住居跡と隣接している。

北東壁以外は遺存状態が良好であった。

形状・規模　平面形は残存部の状況から本来は方形を呈していたものと考えられる。現存では東西約3.7m、南北約3.7mを測る。壁は緩やかに立ちあがり、壁高約15～20cmを測る。



第４図　10号住居跡・出土遺物

炉　　跡　確認されなかった。

主な施設　柱穴は5ヵ所あり、北壁東・西で1ヶ所ずつ（P1・2）、西壁の中央付近に2ヶ所（P3・4）、住居中央からやや南側に2ヶ所（P5・6）ある。これらは、直径約20～45cm、深さ約8～15cmを測る。また、南東隅部には長軸約80cm、短軸約52cm、深さ約32cmを測り隅丸長方形を呈する貯蔵穴が1基確認された。

住居跡の北西部には堅く締まった床面が南北約1.7m、東西約1.1mの範囲にわたってみられた。

遺　　物　1は台付甕、2は甕、3は高坏、4は小型壺である。

小型壺4は貯蔵穴内の北寄り底面上から出土している。台付甕1と高坏3は西壁すぐ側の覆土中から出土し、甕2と鉢5は住居の中央付近床面上からみつかった。帯金具（遺構外78）が住居跡のやや北側覆土中から出土しているが、おそらく後世に混在したものであろう。

b．古墳時代

4号住居跡（第5・6図、第4表、図版2・7）

位置・概要　調査区の西側南部G－1・2グリッドに位置する。北東のコーナーは3号住居跡により切られている。

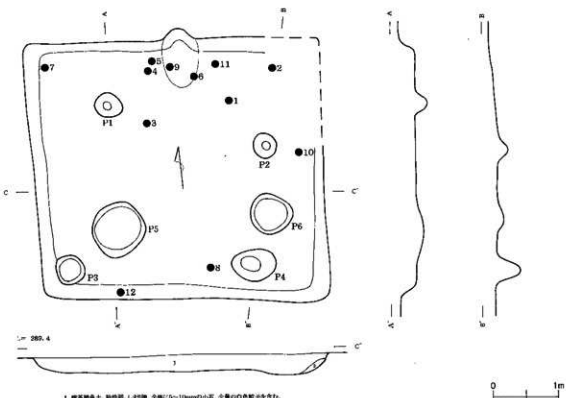
また、北西部コーナーの上面は旧河道跡が被っているが、住居内への流れ込みの状況はない。このような状況からおそらく、本住居跡が完全に埋没した後に河道ができたものと考えられる。

形状・規模　平面形は東西にわずかに長軸をもつ方形を呈し、東西約4.7m、南北4.4m、壁高24～32cmを測る。

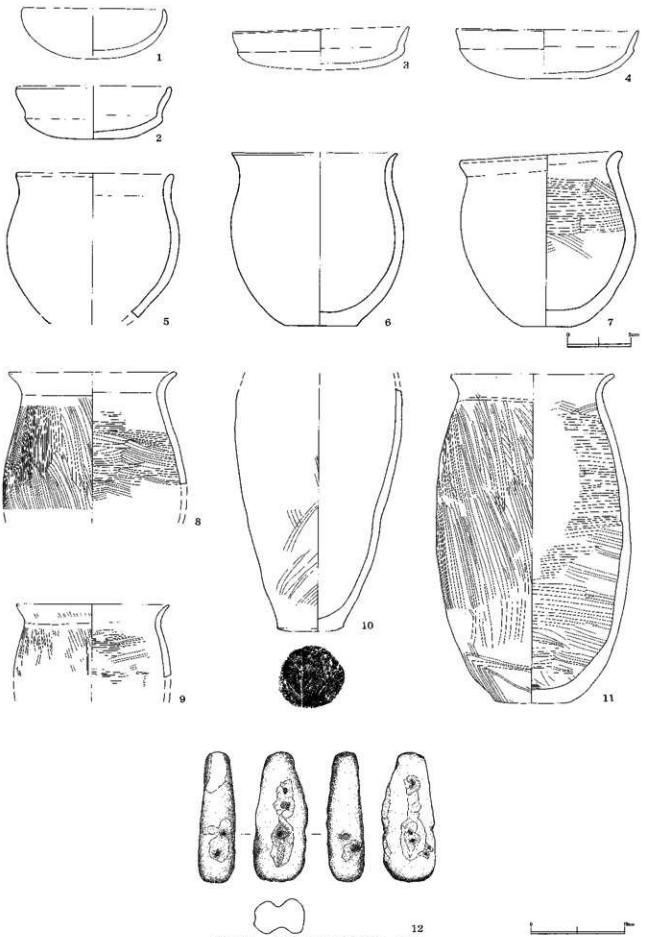
カ マ ド　北壁中央に設けられ、長軸約80cm、短軸約60cmを測り、内部は焼土が厚く充満している。

主な施設　柱穴はP1～4の4本が相当し、直径38～40cm、深さ15～30cmを測る。P5・6は床面上にわずかにできた浅い窪地となっている。

遺　　物　1～4は坏、5～7は小型甕、8～11は長胴甕、12は凹み石である。これらの遺物はカマドがある住居北側に偏在して出土した。とくにカマド周辺には坏4、小型甕5・6、長胴甕11が床面上からまとまって出土している。また、凹み石12は住居南西部壁際の覆土中から出土している。



第5図　4号住居跡（1）



第6図　4号住居跡出土遺物（2）

7号住居跡（第7図、第7表、図版2・7）

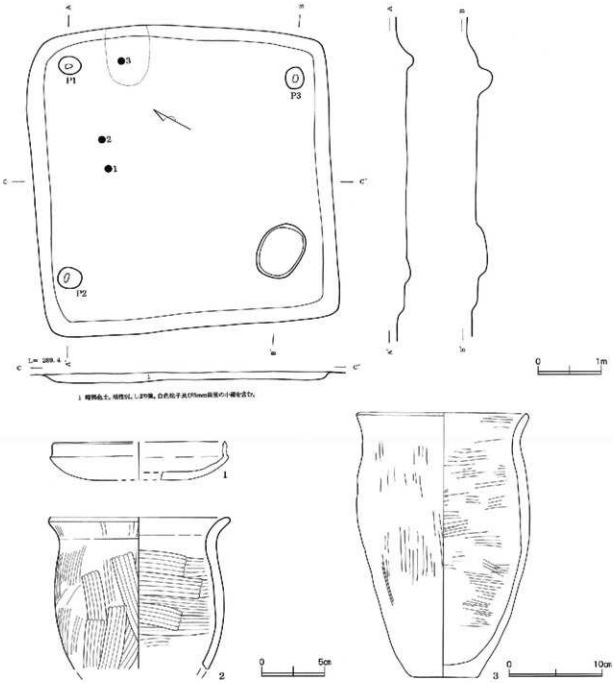
位置・概要　調査区南西部F・G－2～4グリッドに位置する。北東から南西部にかけて確認された旧河道跡に近接し、3・4号住居跡が近くに分布している。

形状・規模　平面形は方形を呈し、東西約5.1m、南北約4.9m、壁高約10～18cmを測る。遺存状態は良好である。

カ　マ　ド　明確な痕跡はないが、住居北東部コーナー付近において長軸約100cm、短軸約75cmの焼土がみられた。

主な施設　北・東・西側のそれぞれのコーナー付近には径35～40cm、深さ8～25cmの柱穴（P1～3）が確認されている。しかし、南西側のコーナーには柱穴はないが、長軸96cm、短軸74cm、深さ15cmの楕円形を呈する浅い土坑状の落ち込みがある。

遺　物　1は坏、2は小型甕、3は長胴甕である。1～3は、住居の北西部床面上からまとまって出土している。



第7図　7号住居跡・出土遺物

11号住居跡（第８図、第11表、図版２・７）

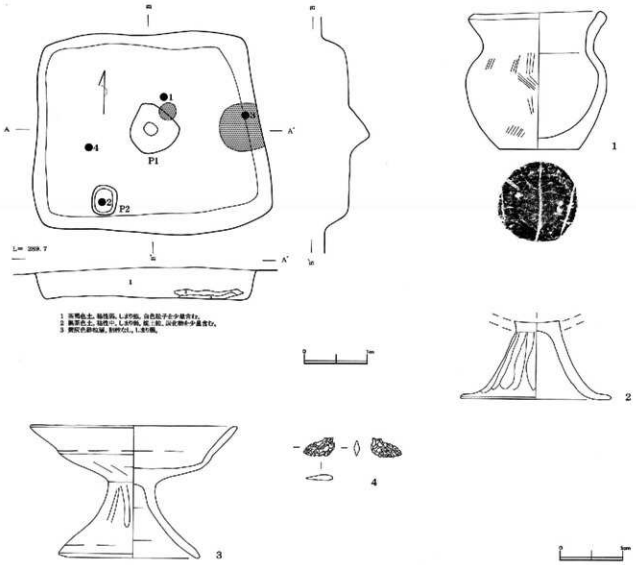
位置・概要　調査区の東側Ｃ・Ｄ−14グリッドに位置する。本住居跡は17・20号住居跡に切られている。この周辺は12・15・17〜22号の８軒の住居跡が複雑に重複し合いながら密に分布している。

形状・規模　平面形は不整な長方形を呈し、東西約3.6m、南北約3.2m、壁高約40〜48を測り、掘り込みが深い住居跡である。遺存状態は良好である。

炉　明確でないが、住居跡東壁中央に長軸約75cm、短軸約65cm、厚さ約８cmの炭化物のまとまりがあり、Ｐ１の北東部の床面上には直径約30cmの焼土跡が検出されている。

主な施設　住居跡中央床面に長径約80cm、短径約30cm、深さ約33cmの土坑状のＰ１があり、住居跡南西部南壁の脇には長軸約48cm、短軸約40cmの隅丸長方形を呈するＰ２が位置している。

遺物　１は小型の壷、２・３は高坏、４は黒曜石製の石匙である。高坏２はＰ１北東部脇の焼土跡付近から、高坏３はＰ２の中から出土した。小型壷１は東壁中央にある炭化物のまとまりから出土している。石匙４は住居跡南西部の覆土中から確認された。



第８図　11号住居跡・出土遺物

12号住居跡（第９図、第12表、図版２・７）

位置・概要　調査区の東側Ｄ・Ｅ－13・14グリッドに位置する。本住居跡の東側には21号住居跡が重複し、北側では17号住居跡を切っている。さらに北側では15・17・18～22号の８軒の住居跡が複雑に重複している。

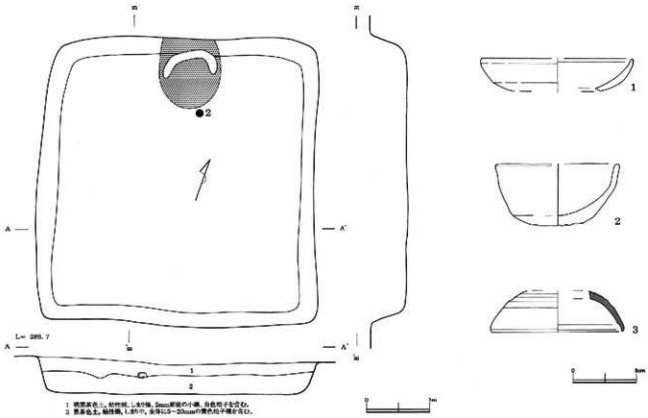
形状・規模　平面形は方形を呈し、東西約4.4m、南北約4.7m、壁高は約50～60cmを測り、深く掘り込まれている。

そして、壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　住居北壁中央に位置する。大きさは長軸約110cm、短軸約100cmを測る。カマド内部には焼土が残存していた。

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　１は坏、２は埦、３は須恵器壺である。２はカマド正面の焚き口部分から出土した。



第９図　12号住居跡・出土遺物

15号住居跡（第10図、第15表、図版３・７）

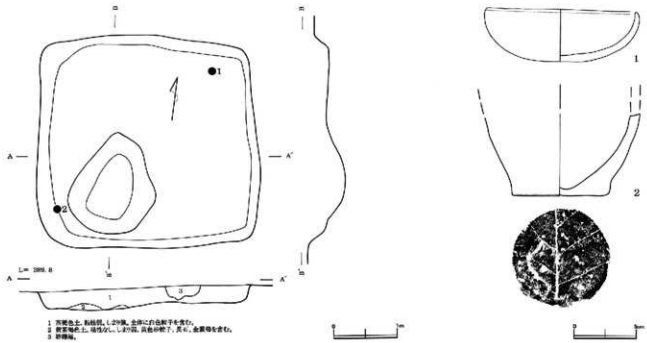
位置・概要　調査区の東側C－15・16グリッドに位置する。本住居跡は22号住居跡を切って構築され、さらに南東部の床面には11号土坑により切られている。この周辺は11・12・17～22号の８軒の住居跡が複雑に重複し合いながら密に分布している。

形状・規模　平面形は方形を呈し、一辺約3.5m、壁高約20～30cmを測り、壁は緩やかに立ちあがる。遺存状態は良好である。

カ　マ　ド　確認されなかった

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　１は坏、２は甕の底部で、１は住居跡北東部の覆土、２は南西部コーナー脇の覆土中から出土している。



第10図　15号住居跡・出土遺物

17号住居跡（第11図、第17表、図版７）

位置・概要　調査区の東側Ｃ・Ｄ－13グリッドに位置する。本住居跡は南側を12号住居跡によって切られており、遺存状態はあまり良くない。この周辺は11・12・15・18～22号の８軒の住居跡が複雑に重複し合いながら密に分布している。

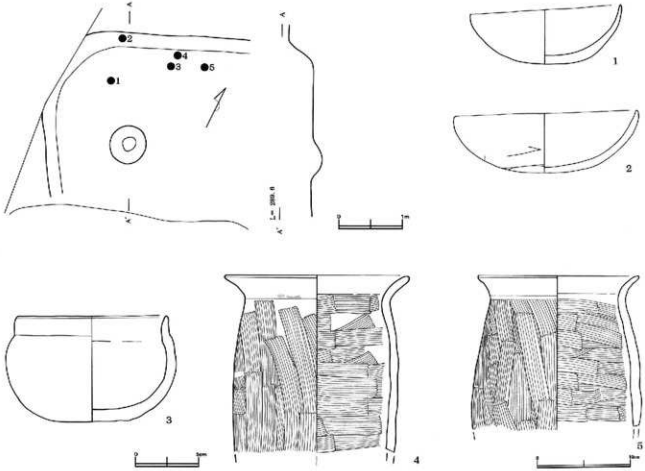
形状・規模　12号住居跡によって削平されていることから、遺存状態は良くない。そのため、住居跡の北西部コーナーを中心とする東西約3.1m、南北約2.7mの範囲が確認されただけであり、本来の規模・形状は把握できない。北壁での壁高は約40cmを測り、緩やかに立ちあがっている。

カ　マ　ド　確認されなかった

主な施設　住居跡北西部のやや西壁寄りに直径約60cm、深さ約18cmを測る柱穴が確認されている。

遺　　物　住居跡の遺存状態が粗悪なわりには豊富に出土している。１・２は坏、３は鉢、４・５は長胴甕である。

これらの遺物は、住居北西部に偏在し北壁際から南側床面周辺にかけて出土している。



第11図　17号住居跡・出土遺物

18号住居跡（第12・13図、第18表、図版２・８）

位置・概要　調査区の東側A・B－13～15グリッドに位置する。本住居跡は19・20号住居跡によって切られているが、削平されている南西部および南壁周辺以外は遺存状態がきわめて良好である。この周辺は11・12・15・17・19～22号の８軒の住居跡が複雑に重複し合いながら密に分布している。

形状・規模　平面形は方形を呈し、一辺約6.8mを測る。壁高約50cmを測り、緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　北壁中央部に設けられ、遺存状態はきわめて良好であった。大きさは長軸約130cm、短軸約110cmを測り、内部には焼土が大量に含まれていた。本カマドの手前には左右に袖石が設けられ、それらは直立した状態で出土している。また、カマド内部の中央付近には支柱石1点が据え置かれていた。

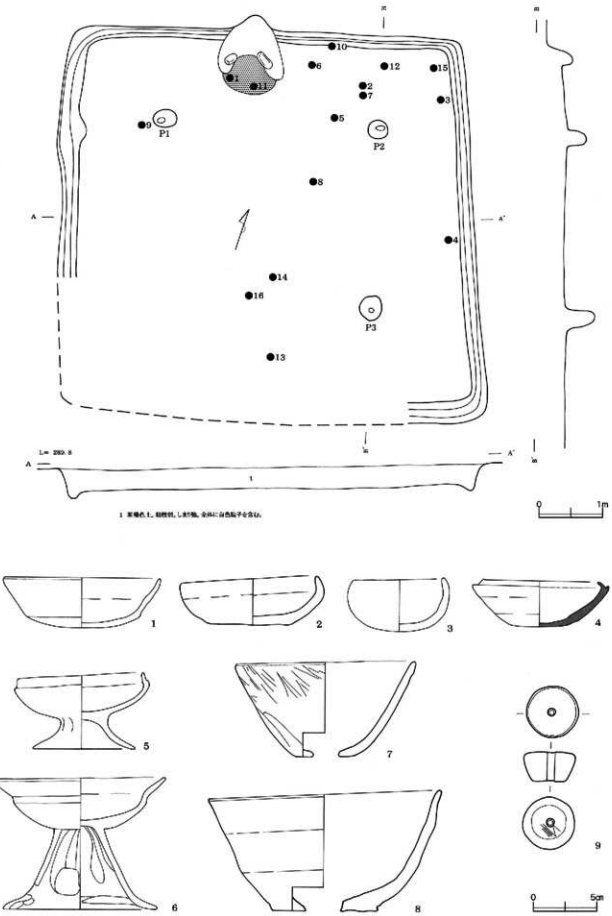
主な施設　南西部コーナーと南壁を除いて壁の周囲には幅約20cm、深さ約10cmを測る周溝が確認された。また、南西部を除いた床面上では柱穴（Ｐ1～３）が確認された。Ｐ１は直径約40cm、深さ約35cm、Ｐ２は直径約35cm、深さ約30cm、Ｐ３は直径約40cm、深さ約45cmをそれぞれ測る。

遺　物　１～４は坏類でこのうち４は須恵器である。５・６は高坏、７・８は甕、10～15は甕類で10は小型の甕、11は長胴甕、12～15は球胴甕である。９は土製の紡錘車である。

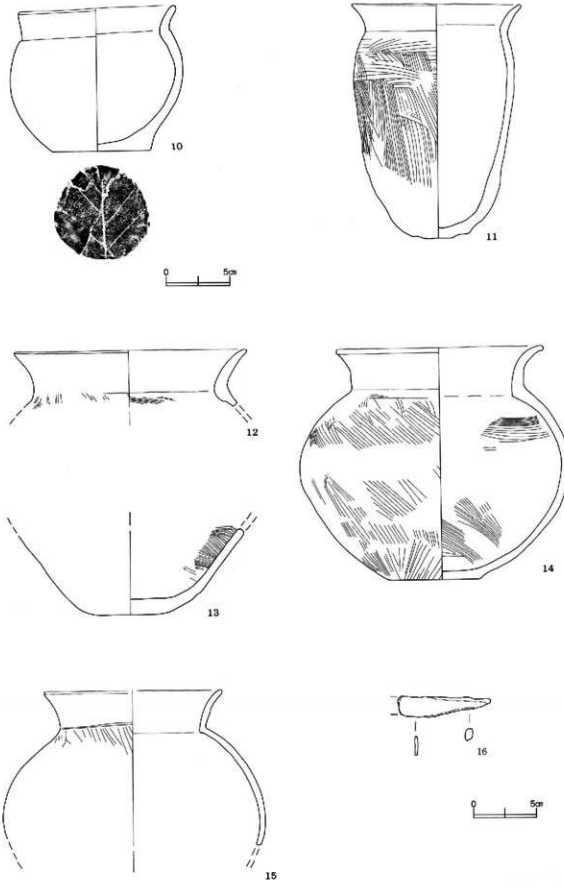
これらの遺物は、おもにカマドから住居の北東コーナーにかけてその大半が偏在し出土している。坏１はカマドの西側焚き口付近から、高坏５・６はカマドから東側の床面上にある。甕７は住居北東部コーナーの床面上から出土し、この甕７の中には坏２が重ねられていた。甕８は住居中央の床面上で出土した。

甕類は、11はカマド正面の焚き口際から出土している。また、球胴甕12と15が住居の北東コーナー、13・14は住居の南側で、いずれも覆土中から出土している。

紡錘車１は住居の北西部、Ｐ１付近の覆土中からみつかった。



第12図　18号住居跡・出土遺物（1）



第13図　18号住居跡出土遺物（2）

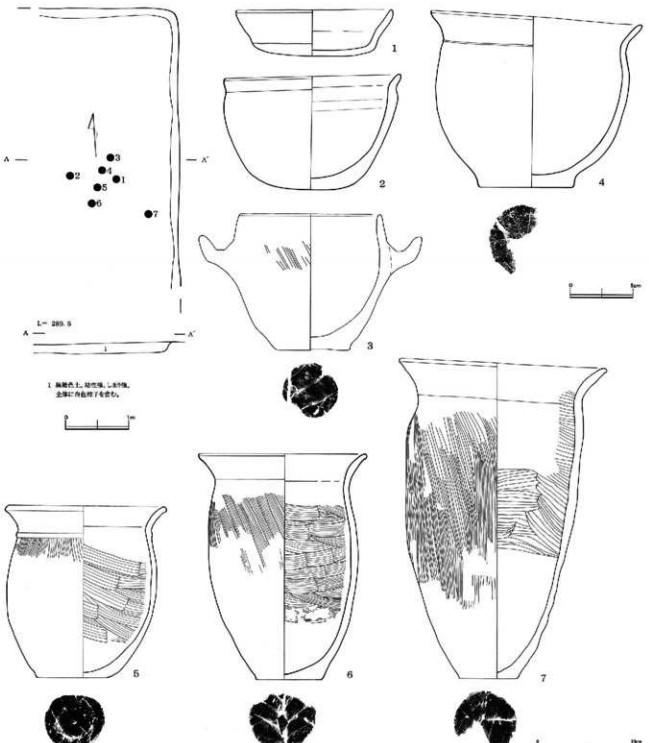
20号住居跡（第14図、第20表、図版３・８）

位置・概要　調査区の東側Ｂ・Ｃ－13・14グリッドに位置する。この周辺は11・12・15・17・19・21・22号の８軒の住居跡が重複し合いながら密に分布している。住居の南側は17号住居跡によって削平され、北東部は18号住居跡を切っている。そして、北壁の西側は遺存状態が悪く、壁は確認できなかった。

形状・規模　平面形は遺存状態から方形を呈していたとみられ、残存部の規模は南北約5.7m、東西約2.2mである。

遺　物　１は坏、２は鉢、３～７は甕類で、３は把手付きの小型のもの、４・５は小型の甕、６・７は長胴甕である。

これらの遺物は住居の東側中央付近の床面上からまとまって出土している。



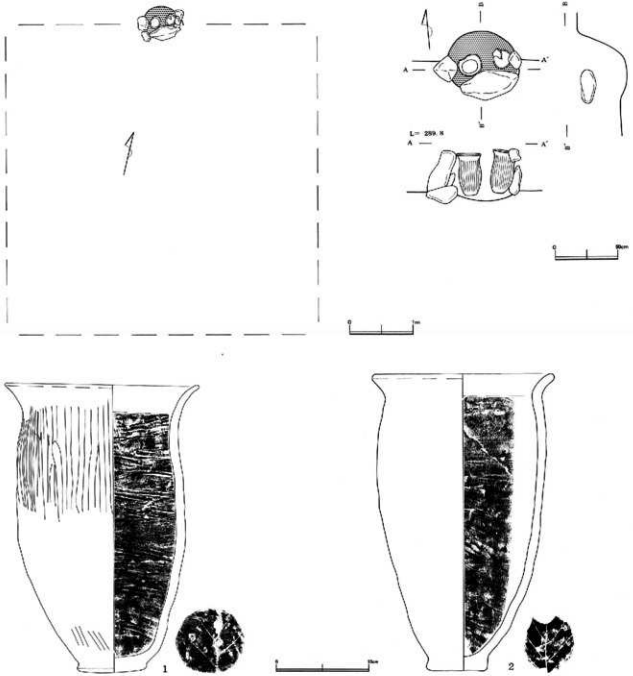
第14図　20号住居跡・出土遺物

22号住居跡（第15図、第22表、図版３・８）

位置・概要　調査区の東側Ｂ－15グリッドからカマド跡が発見された。この周辺は11・12・15・17～21号の８軒の住居跡が重複し合いながら密に分布している。本住居跡は調査の都合上、カマド部分のみの調査となった。

カ　マ　ド　長胴甕１・２をカマドの主軸に対して横一列に置いた２つ掛けのカマドであり、長軸70㎝、短軸55㎝を測る。4つの縦長で大型の石を左右２個一対に直立に掘えてカマド袖部の芯を作り出している。さらにこれら袖部の石の上には長さ約50㎝、幅約23㎝の巨大な扁平石を横向きに置いて、焚き口上部に天上石を設けている。

カマド内部には焼土が大量に充満し、その範囲は焚き口部にまでおよんでいた。



第15図　22号住居跡・出土遺物

c．奈良時代

8号住居跡（第16図、第8表、図版3・8）

位置・概要　調査区の中央南側H－6・7グリッドに位置する。周辺には近接して9・10号住居跡が分布している。遺存状態は良好である。

形状・規模　平面形は方形を呈し、東西約2.6m、南北約2.9m、壁高は25～30cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。

カ　マ　ド　南東部に構築されている。大きさは、長軸90cm、短軸85cmである。カマドの左右には袖石が設けられ、この上に長さ約65cm、幅約25cmの天井石が据えられている。また、カマド内部から焚き口にかけて大量の焼土が遺存しており、燃焼部に相当するあたりから直立した状態で支脚の代用とみられる支柱石が遺されていた。

主な施設　北西部の西壁寄りに、直径約20cmの柱穴がある。

遺　　物　本住居跡から出土したものはすべて須恵器であり、ほとんどのものは南東部に位置するカマドの南側から住居南東隅部に偏在し出土している。1～7は坏、8は甕、9は大甕の破片である。

床面上から出土したものは坏1・2のみである。坏3～7は覆土中からの出土であるが、破片となったものがかなりな割合で復元されている。蓋8はカマドの天井石の中央上面から、大甕の破片9は覆土中から出土している。

16号住居跡（第17図、第16表、図版3・9）

位置・概要　調査区の中央からやや東側E・F－10・11グリッドに位置する。住居跡の南西側は13号住居跡によって切られ、東側は調査区外となっている。重複が認められるが遺存状態は比較的良好である。

形状・規模　平面形は方形を呈し、東西約3.6m、南北約3.5mを測り、壁高は約40～50cmで比較的掘り込みの深い住居跡である。壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　北壁の中央からやや東よりに構築されている。長軸約80cm、短軸約65cmを測る。カマドの袖部には、約15～40cm大の石が使われ袖石を設けている。また、燃焼部は長軸約70cm、短軸約60cmの浅い掘り込みが認められる。

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　1は須恵器の坏、2は須恵器の小型壺、3は甕である。これらの遺物のうち、小型壺2と甕3はカマドの南東側にあり、壺2は覆土中、甕3は床面上から出土している。坏1は西壁中央脇の覆土から出ている。

19号住居跡（第18図、第19表、図版3・9）

位置・概要　調査区の東側B・C－14・15グリッドに位置する。本住居跡は18号住居跡の南側を切っている。

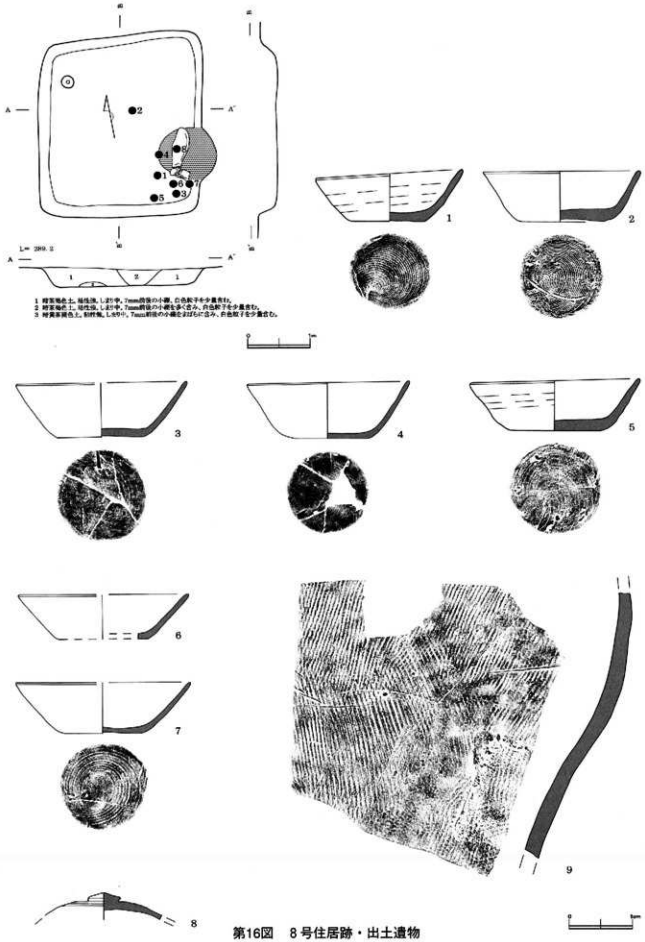
この周辺は12・15・17・18・20～22号の8軒の住居跡が重複し密に分布している。18号住居跡と重複する部分では壁が明確に確認された。

形状・規模　全体的に遺存状態が悪いが、一辺約4.0m前後の方形を呈すと考えられる。壁高は東壁で約10cmを測って浅くなっており、壁は緩やかに立ちあがる。

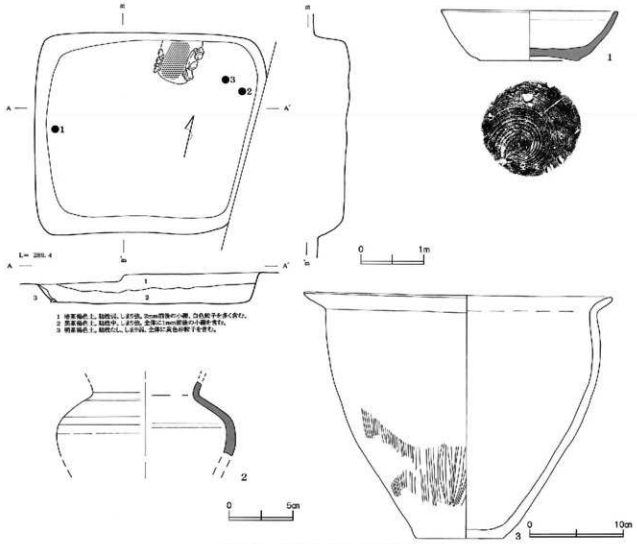
カ　マ　ド　北壁の中央東寄りには長軸約100cm、短軸約90cmの焼土のまとまりが認められ、本来はカマドが存在していた可能性がある。

主な施設　壁の周縁を巡る部分的な周溝が2ヶ所で確認されている。住居北西部の周溝は長さ約170cm、幅約12～22cm、深さ約15cm、東壁中央から北側にかけては長さ約1.9m、幅約15～18cm、深さ約13cmを測る。

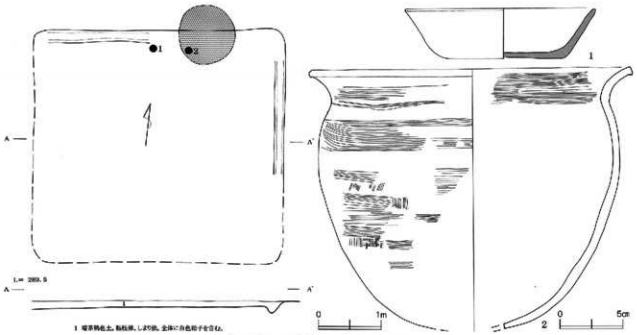
遺　　物　須恵器坏1と甕2が北壁中央に分布する焼土の周りから出土している。



第16図　8号住居跡・出土遺物



第17図　16号住居跡・出土遺物



第18図　19号住居跡・出土遺物

d．平安時代

1号住居跡（第19図、第1表、図版3・9）

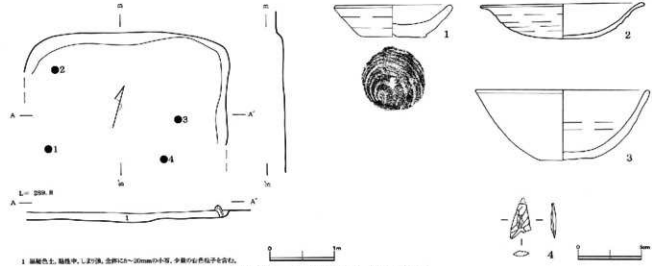
位置・概要　調査区の北西部A´・A－1・2グリッドに位置する。近接した西側に5号住居跡、南側には6号住居跡が分布している。

形状・規模　住居跡の南西部の大半は遺存状態が良くなかったため確認できなかった。幸い、住居跡の北側東、西では良好なコーナー部分を確認することができ、東西約3.3m、残存部の南北約1.9mを測ることが分かった。本来は一辺約3.0m程の方形の住居跡であったと考えられる。北と東側の壁は緩やかに立ちあがり、壁高約10cmを測る。

カ　マ　ド　確認されなかった。

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　1は土師質小皿、2は土師器の皿である。3は土師器の坏、4は石鏃である。1・2は住居の西側、3・4は東側に分布しており、いずれも覆土中からの出土である。



第19図　1号住居跡・出土遺物

2号住居跡（第20図、第2表、図版4・9）

位置・概要　調査区の南西部H・I－1・2グリッドに位置する。北側には3・4・7号住居跡が分布している。

形状・規模　平面形は不整形な長方形を呈し、東西約3.3m、南北約4.0mを測り、壁高は約8～15cmで壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　明確なものは確認されていないが、住居跡の南西隅には径約50～60cmの範囲にわたり焼土がまとまって検出され、その周囲には大型の石が伴っていた。

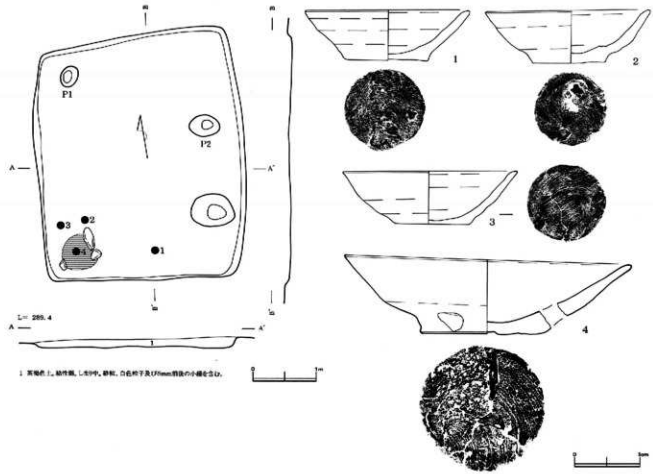
主な施設　柱穴が3ヶ所（P1～3）で確認され、P1は北西隅部、P2は東壁中央付近、P3は南東部で確認されている。それぞれの大きさは、P1は径35×26cm、P2は径50×34cm、P3は径70×50cmを測り、各々比較的浅い掘り込みとなっている。

遺　　物　1～3は坏、4は底部周縁部の脇に3つの孔が穿たれた大型の坏である。坏1～3は住居跡の南西部焼土跡北側付近と南壁脇にあり、このうち1・2は床面上から出土している。

また、4の大型の皿は南西部焼土跡の中から出ている。

3号住居跡（第21図、第3表、図版4・9）

位置・概要　調査区の南西部F・G－2グリッドに位置する。4号住居跡の上部に構築され、東側に7号住居跡がある。また、北西部コーナーの上面は旧河道跡が4号住居跡と同様に重なっている。本住居の北西隅部には河道跡にみられる砂礫が覆土として住居内へ流れ込んでおり、河の影響を受けたことを



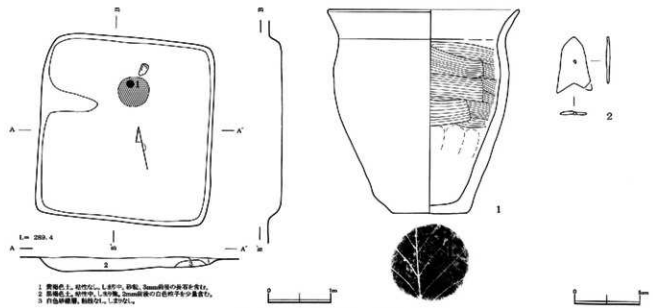
第20図　2号住居跡・出土遺物

物語っていた。

形状・規模　平面形は長方形を呈し、東西約3.0m、南北約2.9mを測り、壁高は約10～20cmで緩やかに立ちあがる。

主な施設　北東部に一部硬く締まった床面があり、西壁には壁と直行し住居内部へと突出する土手状の施設がある。

遺　物　1は甕、2は鉄鏃で、これらの遺物は住居の北側にある焼土跡西側周辺の床面上から出土している。



第21図　3号住居跡・出土遺物

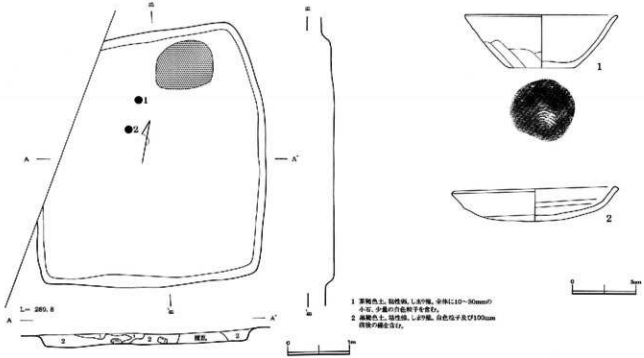
5号住居跡（第22図、第5表、図版4・9）

位置・概要　調査区の北西隅部A'・A－0・1グリッドに位置する。住居跡の西側は調査区外となっており、東側には1号住居跡が近接している。また、北東部にある1号溝状遺構を切っている。本住居跡は南側の床面のほぼ全面にわたって、大量の川原石が出土している。

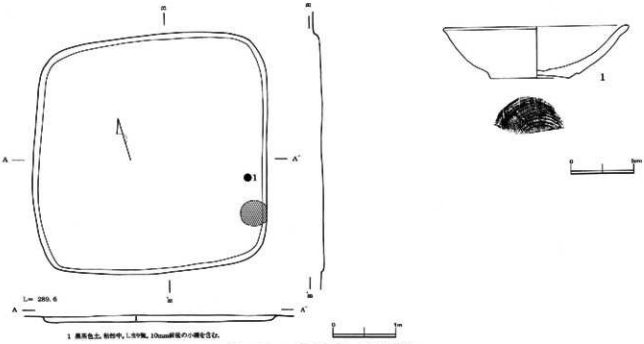
形状・規模　平面形は不整形な方形を呈し、東西約4.0m、南北約4.1m、壁高は約15～20cmを測り、壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　住居北東部の北壁付近に径約90×75cmの焼土跡が確認され、本来カマドがあった可能性もある。

遺　　物　1は土師器の坏、2は土師器の皿である。2点ともに住居中央からやや北側の床面上で出土している。



第22図　5号住居跡・出土遺物



第23図　6号住居跡・出土遺物

6号住居跡（第23図、第6表、図版4・9）

位置・概要　調査区の北西B・C－2グリッドに位置する。本住居跡の南西部には掘立柱建物跡が隣接している。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈し、東西約3.7m、南北約3.8m、壁高は約5～10cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。

カ　マ　ド　確認できなかったが、住居南東の東壁部に径約40～45cmの焼土が検出されている。

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　南東部の東壁に近い覆土中から坏1が出土した。

9号住居跡（第24・25図、第9表、図版4・9）

位置・概要　調査区の中央から南西部F・G－5・6グリッドに位置する。住居跡の南に8号住居跡、西側には10号住居跡が近接している。

形状・規模　平面形は方形を呈し、一辺約3.6m、壁高は約5～10cmを測り、壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　住居南東部に位置する。大きさは長軸約80cm、短軸約60cmを測り、長径約13～40cmの大小の川原石を多く利用し構築されている。カマド内部には大量の焼土が残存していた。

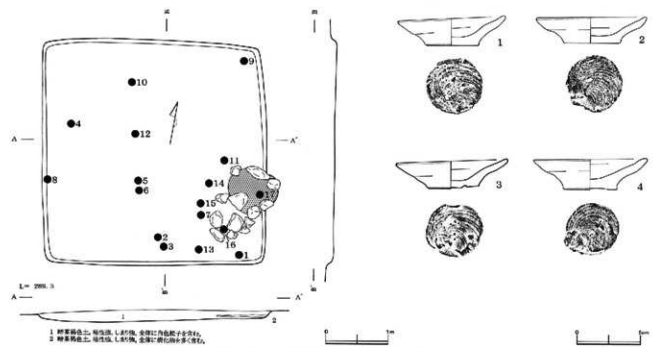
主な施設　確認されなかった。

遺　　物　カマド周辺の覆土中と、住居跡中央から北側の床面上にかけて多くの遺物が出土している。1～11は土師質の小皿、12・13土師質の坏、14～16脚高高台の小皿、17は脚高高台坏、18は打製石斧である。

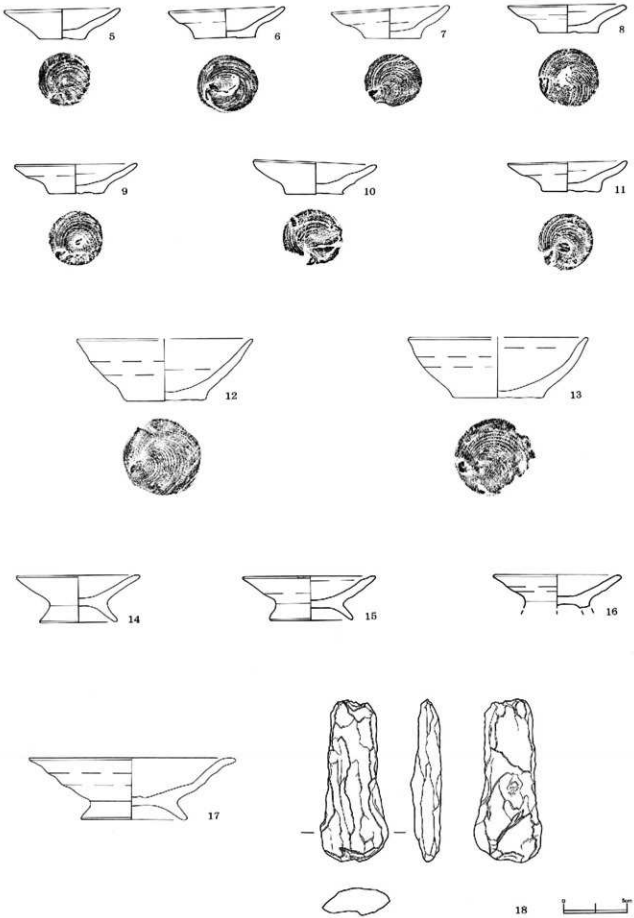
小皿11点のうち5点の1～3・7・11は住居跡南東部の覆土中からすべて出土しており、1～3は南壁に沿って、7・11はカマド周辺に偏在している。これら以外の4～6・8～10はおよそ住居跡の中央から北側にかけて出土しており、このうち5・8以外のものは全て床面上から出土している。

坏12は住居跡中央の床面上から、坏13は小皿1～3と伴に南壁脇の覆土中から出土している。脚高高台の小皿14～16はカマド手前の覆土中、脚高高台坏17はカマドの煙道部付近でみつかっている。

打製石斧18は住居跡北西隅の覆土中からそれぞれ出土している。



第24図　9号住居跡・出土遺物（1）



第25図　9号住居跡出土遺物（2）

13号住居跡（第26図、第13表、図版4・9）

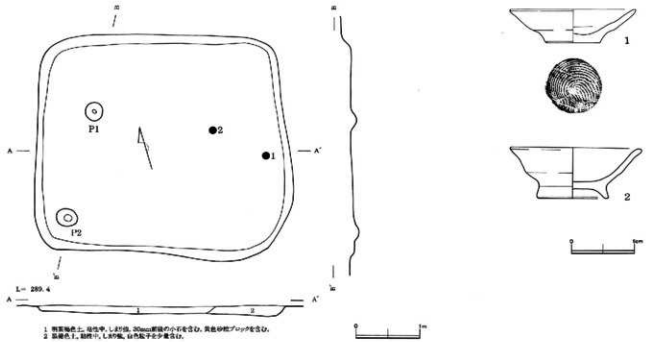
位置・概要　調査区の中央付近E・F－10・11グリッドに位置する。本住居跡は16号住居跡の南西部を切って構築されている。

形状・規模　平面形は東西にやや長軸のある隅丸状の長方形を呈し、東西約4.0m、南北約3.6m、壁高は約10～15cmを測り、壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　確認されなかった。

主な施設　2個の柱穴（P1・2）が住居跡東側床面上で確認された。P1は径約26cm、深さ約10cm、P2は径34×28cm、深さ8cmを測る。

遺　　物　小皿1と脚高高台坏2がある。これらは住居跡東側にあり、1は壁脇の覆土中、2は床面上からの出土である。



第26図　13号住居跡・出土遺物

21号住居跡（第27図、第21表、図版9）

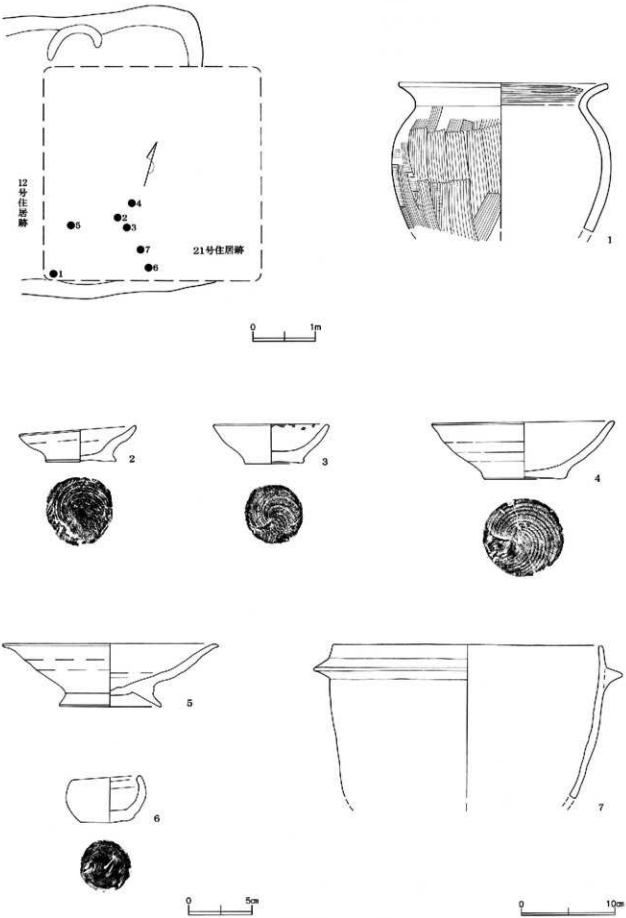
位置・概要　調査区の東側D・E－13・14グリッドに位置する。本住居跡は12号住居跡の東半部を切っている。この周辺のとくに北部は11・12・15・17～20・22号の8軒の住居跡が複雑に重複し合って密に分布している。

形状・規模　本住居跡周辺では複数の遺構の重複などもあり、明確な平面形態は捉えにくかった。

カ　マ　ド　確認されなかった。

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　1は甕、2・3は土師質の小皿、4は土師質の坏、5は脚高高台坏、6は小埦、7は羽釜で、各器種がまとまって出土している。



第27図　21号住居跡・出土遺物

e．時期不明のもの

14号住居跡（第28図、第14表、図版４・９）

位置・概要　調査区の東端Ａ・Ｂ－17グリッドに位置する。本住居跡の半分以上は調査区外となっている。

形状・規模　確認可能な部分は東西約2.4m、南北約3.4mで、おそらく方形を呈するものであろう。掘り込みはやや深く壁高は約35cmを測り、壁は緩やかに立ちあがる。

カ　マ　ド　確認されなかった。

主な施設　確認されなかった。

遺　　物　欠損した土製の匙１が調査区の壁に近い北東部の覆土中から１点出土している。その他、北西部西壁にほぼ平行するように２本の大型の炭化材が覆土中から出土している。

1 灰褐色土。粘性弱、しまり中、全体に白色粒子を多く含む。焼土と炭を含む。
2 木の炭化材。

第28図　14号住居跡・出土遺物

第１表　１号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師質土器	小皿	器高 2.6cm 口径 9.0cm 底径 5.0cm	金雲母を多く含む。	暗茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	19	9
2	土師器	皿	器高 2.95cm 口径 12.6cm 底径 3.1cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部ヘラ調整。ロクロ左回転。	19	9
3	土師器	坏	器高 5.7cm 口径 13.5cm 底径 4.4cm	赤色粒子を含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部ヘラ調整。	19	9

No	器種	計測値（cm）			石質	備考	挿図	図版
		長軸	短軸	厚さ				
4	石鏃	2.8	1.6	0.4	片岩	尖頭器形。	19	

第２表　２号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師質土器	坏	器高 4.05cm 口径 12.9cm 底径 6.4cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	20	9
2	土師質土器	坏	器高 4.3cm 口径 13.3cm 底径 5.8cm	キメ細かく、金雲母を多く含む。	淡黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	20	9
3	土師質土器	坏	器高 4.45cm 口径 13.8cm 底径 6.0cm	キメ細かく、金雲母を多く含む。	内面 暗茶褐色 外面 黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切後、ヘラ調整。ロクロ右回転。	20	9
4	土師質土器	大型坏	器高 6.5cm 口径 23.0cm 底径 9.6cm	金雲母を多く含む。	暗茶褐色	良	体部下方に直径17mmの円孔が３口。外面底部と体部にスス痕有り。底部糸切痕。ロクロ右回転。	20	9

第１・２表　住居跡出土遺物観察表１

第３表　３号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	小型甕	器高 16.3cm 口径 15.0cm 底径 6.0cm	長石、石英、赤色粒子を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面、体部横方向のハケ目。底部木葉痕。	21	9

No	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	素材	備考	挿図	図版
2	鉄鎌	3.7	2.6	0.3	鉄			

第４表　４号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 推定口径 4.0cm 11.0cm	キメ細かく緻密。	暗茶色	良	内面、外面横方向のヘラ磨き。	6	7
2	土師器	坏	器高 推定口径 4.2cm 12.0cm	キメ細かく緻密。	内面 黒色 外面 淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内黒土器。	6	7
3	土師器	坏	器高 口径 底径 3.6cm 13.9cm 5.7cm	キメ粗い。長石、石英を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面底部朱付着。	6	7
4	土師器	坏	器高 口径 4.15cm 14.4cm	長石、石英、赤色粒子を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上。内面に横方向のヘラ磨き。内面、外面に朱が施されている。	6	7
5	土師器	小型甕	現存器高 口径 11.5cm 12.2cm	キメ粗い。長石、石英を含む。	暗茶褐色	良	外面胴部に縦方向のハケ目。内面口辺部から頸部にかけて横方向のハケ目。	6	7
6	土師器	小型甕	器高 推定口径 底径 13.9cm 13.0cm 5.8cm	キメやや粗い。長石を多く含む。	茶褐色	やや良	口辺部横ナデ仕上。外面底部及び胴部下半ヘラ削り。	6	7
7	土師器	小型甕	器高 口径 底径 14.2cm 12.5cm 4.6cm	長石、石英、金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上。外面胴部上半は縦方向のハケ目。胴部下半は斜め方向のハケ目。内面胴上半横方向の調目。内面底部溶脱によるナデ整形。外面底部ヘラ削り。	6	7
8	土師器	長胴甕	現存器高 口径 9.0cm 16.0cm	長石、石英を多く含む。	茶褐色	良	外面縦方向のハケ目。内面横方向のケ目。	6	7
9	土師器	長胴甕	現存器高 口径 14.7cm 7.4cm	長石、石英を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上。外面胴部縦方向のハケ目。内面胴部横方向のハケ目。	6	7
10	土師器	長胴甕	現存器高 口径 26.0cm 17.05cm	石英、赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良	外面胴部縦方向のハケ目。内面胴部下半横方向のハケ目。底部木葉痕。	6	7
11	土師器	長胴甕	器高口径 底径 36.0cm 17.6cm 5.6cm	長石、石英、赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良	内面横ナデ仕上げ。外面に縦方向のハケ目。内面に横方向のハケ目。底部木葉痕。	6	7

No	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	素材	備考	挿図	図版
12	凹石	13.8	5.65	3.6	安山岩		6	7

第５表　５号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 口径 底径 4.3cm 12.0cm 5.1cm	キメ細かく緻密。赤色粒子を含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部放射状暗文。外面底部及び下半部ヘラ整形。	22	9
2	土師器	皿	器高 口径 底径 2.85cm 12.9cm 5.0cm	長石、赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部に幅4 mmの段が一周する。	22	9

第６表　６号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師質土器	坏	器高 口径 底径 4.2cm 14.6cm 6.3cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	暗茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	23	9

第７表　７号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高推定 口径推定 3.2cm 14.4cm	赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良	外面口辺部横ナデ仕上げ。外面、内面体部横方向のヘラ磨き。	7	7
2	土師器	小型甕	現存器高 口径 13.8cm 14.5cm	長石。赤色粒子、雲母を含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ。外面胴部縦方向のハケ目。内面胴部横方向のハケ目。	7	7
3	土師器	長胴甕	器高 口径 底径 29.8cm 18.6cm 7.3cm	キメ粗い。長石、石英を含む。	茶褐色	良	外面胴部縦方向のハケ目。内面胴部横方向のハケ目。	7	7

第３～７表　住居跡出土遺物観察表２

第8表　8号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	須恵器	坏	器高 4.1cm 口径 11.7cm 底径 5.7cm	キメ細い。長石含む。	淡灰色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ左回転。	16	8
2	須恵器	坏	器高 4.0cm 口径 12.4cm 底径 6.6cm	キメ細かく緻密。	淡灰色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	16	8
3	須恵器	坏	器高 4.6cm 口径 12.8cm 底径 5.9cm	キメ細い。長石含む。	淡灰色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	16	8
4	須恵器	坏	器高 4.2cm 口径 13.1cm 底径 7.2cm	キメ細かく緻密。	明灰色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	16	
5	須恵器	坏	推定器高 3.6cm 推定口径 13.4cm 推定底径 7.1cm	キメ細い。長石含む。	淡灰色	良	口辺部横ナデ仕上げ。	16	8
6	須恵器	坏	器高 4.4cm 推定口径 13.4cm 底径 6.8cm	長石を多く含む。	淡灰色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	16	
7	須恵器	坏	器高 4.1cm 推定口径 13.8cm 底径 6.2cm	長石を含む。	淡灰色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	16	
8	須恵器	蓋	現存器高 2.2cm	キメ細かく緻密。	明灰色	良好	直径24cmの撥を持つ。撥から甲部にかけて自然釉付着。外面甲部に二条の平行沈線が一周する。	16	8
9	須恵器	大甕	現存長 22.4cm	キメ細かく緻密。	明灰色	良好	外面叩目。外面及び内面に自然釉付着。外面に幅9.5cmの付着物有り。	16	8

第9表　9号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師質土器	小皿	器高 2.4cm 口径 8.4cm 底径 4.1cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	暗茶色	良	外面及び内面体部に灯明スス付着。口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	24	9
2	土師質土器	小皿	器高 2.3cm 口径 8.6cm 底径 4.5cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	24	9
3	土師質土器	小皿	器高 2.35cm 口径 8.7cm 底径 4.1cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	暗茶色	良	内面体部に灯明スス付着。口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	24	9
4	土師質土器	小皿	器高 2.55cm 口径 8.8cm 底径 4.3cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	24	9
5	土師質土器	小皿	器高 2.5cm 口径 8.9cm 底径 3.5cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	25	9
6	土師質土器	小皿	器高 2.5cm 口径 9.0cm 底径 4.9cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
7	土師質土器	小皿	器高 2.7cm 口径 9.2cm 底径 4.3cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ左回転。	25	9
8	土師質土器	小皿	器高 2.3cm 口径 9.4cm 底径 4.8cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	暗茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
9	土師質土器	小皿	器高 2.65cm 口径 9.45cm 底径 4.7cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
10	土師質土器	小皿	器高 2.8cm 口径 9.5cm 底径 4.6cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
11	土師質土器	小皿	器高 2.4cm 口径 9.5cm 底径 4.3cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	暗茶色	良	内面口辺部に灯明スス付着。口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
12	土師質土器	坏	器高 5.0cm 推定口径 14.0cm 底径 6.4cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	暗茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
13	土師質土器	坏	器高 4.9cm 推定口径 14.2cm 推定底径 6.5cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	25	9
14	土師質土器	脚高高台小皿	器高 3.8cm 口径 9.4cm 底径 6.0cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部及び摺部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	25	9

第8・9表　住居跡出土遺物観察表3

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
15	土師質土器	脚高高台小皿	現存器高 2.5cm 口径 9.9cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	25	9
16	土師質土器	脚高高台小皿	器高 3.6cm 口径 10.4cm 底径 6.6cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	内面口辺部に灯明スス付着。口辺部及び器部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	25	9
17	土師質土器	脚高高台坏	器高 5.0cm 口径 16.2cm 底径 8.5cm	金雲母を多く含む。	黒茶色	良	口辺部及び器部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	25	9

No	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	素材	備考	挿図	図版
18	打製石斧	13.1	5.4	2.1	粘板岩		25	

第10表　10号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	台付甕	現存器高 18.2cm 口径 18.6cm	長石、石英を含む。	暗茶褐色	良	口辺部にヘラ状工具による刻みを有す。外面頸部縦方向のハケ目。外面胴部斜め方向のハケ目。	4	7
2	土師器	甕	現存器高 13.2cm 口径 15.6cm 胴最大径 19.5cm	キメ細い。赤色粒子を含む。	茶褐色	良好	内面横方向のヘラ磨き。外面口辺部横方向の櫛描き波状文。外面胴部斜めの櫛描き波状文と斜めのハケ目。	4	7
3	土師器	高坏	現存器高 7.8cm 口径 18.2cm	長石、石英を含む。	赤茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面及び内面体部横方向のヘラ磨き。	4	7
4	土師器	小型壺	現存器高 9.3cm 胴最大径 10.4cm 底径 4.6cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良	外面胴部横方向のヘラ磨き。	4	7

第11表　11号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	小型甕	器高 11.1cm 口径 10.1cm 底径 6.3cm	長石、赤色粒子を含む。	暗茶色	良	外面胴部縦方向のハケ目。底部木葉痕。	8	7
2	土師器	高坏	現存器高 6.3cm 底径 11.9cm	キメ細い。赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良好	外面脚部縦方向のヘラ削り後、横方向のヘラ磨き。内面脚部縦方向のヘラ削り。裾部横ナデ仕上げ。	8	7
3	土師器	高坏	器高推定 10.6cm 口径底径 16.4cm 11.3cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面脚部縦方向のヘラ削り後、横方向のヘラ磨き。外面裾部横ナデ後。ヘラ削り整形。内面坏底部ヘラ整形後、横方向のヘラ磨き。	8	7

No	器種	計測値(cm) 長軸	短軸	厚さ	素材	備考	挿図	図版
4	石匙	1.5	2.15	0.45	黒曜石		8	

第12表　12号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 4.95cm 推定口径 12.0cm 底径 2.5cm	キメ細い。長石、雲母を含む	外面黒茶色 内面淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面底部から体部に放射状のヘラ整形痕。外面底部へラ調整。	9	7
2	土師器	壺	推定器高 4.95cm 口径 9.5cm 底径 2.5cm	キメ細い。長石、雲母を含む	外面黒茶色 内面淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面底部から体部に放射状のヘラ整形痕。外面底部へラ調整。	9	7
3	須恵器	蓋	口径 10.4cm	キメ粗い。長石を含む。	淡灰色	良	ロクロ整形、口辺部横ナデ。	9	7

第13表　13号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師質土器	小皿	器高口径 2.7cm 口径 10.0cm 底径 4.4cm	キメ細い。金雲母を多く含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	26	9
2	土師質土器	脚高高台坏	器高口径 4.1cm 口径 10.3cm 底径 5.5cm	キメ細く緻密。金雲母を多く含む。	内面黒色 外面暗茶褐色	良好	内面全体を横方向のヘラ磨き。外面口辺部にヘラで押し上げた痕跡が3ヶ所。口辺部に灯明スス付着。内黒上器。	26	9

第14表　14号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土製品	匙	長軸 6.6cm 短軸 3.2cm 厚さ 0.75cm	キメ細い。長石、金雲母を含む。	黒茶色	良	内外面ともにヘラ磨き仕上げ。	28	9

第9・14表　住居跡出土遺物観察表4

第15表　15号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 4.3cm 口径 11.8cm	キメ細い。長石、石英を含む	外面 黒茶色 内面 淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部横方向のヘラ磨き。外面体部横方向のヘラ磨き。外面底部へラ削り。	10	7
2	土師器	甕	底径 7.8cm	長石、石英、赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良	内面胴部横方向のハケ目。内面底部に指頭圧痕有り。底部木葉痕。	10	7

第16表　16号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	須恵器	坏	器高 4.15cm 口径 14.2cm 底径 8.1cm	長石を含む。	淡灰茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ左回転。	17	9
2	須恵器	壺	器高 6.1cm 推定胴径 14.6cm	キメ細かく緻密。	明灰色	良好	外面胴部上半に二条の平行沈線を持つ。内外面胴部横ナデ仕上げ。	17	9
3	土師器	甕	器高 26.4cm 口径 33.4cm 底径 9.4cm	長石、石英を含む。	茶褐色	良好	外面胴部縦方向のハケ目。口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横ナデ、底部に指頭圧痕。	17	9

第17表　17号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 4.8cm 口径 12.0cm	キメ細かい。赤色粒子を含む	黒茶色	良	内面、外面体部横方向のヘラ磨き。外面底部は雑なヘラ磨き。	11	7
2	土師器	坏	器高 5.05cm 口径 14.4cm	キメ細かく緻密。	黒褐色	良好	内面、外面体部横方向のヘラ磨き。外面底部から体部にかけてヘラ削り。	11	7
3	土師器	鉢	器高 8.5cm 口径 12.0cm 底径 4.0cm	キメ細かい。長石、雲母を含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面の一部に斜めのハケ目。外面底部から体部にかけヘラ削り。	11	7
4	土師器	長胴甕	現存器高 19.0cm 口径 19.0cm	キメ細かい。長石、石英を含む。	明褐色	良好	口辺部横ナデ仕上。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目。	11	7
5	土師器	長胴甕	現存器高 16.0cm 口径 16.7cm	キメ細かい。長石、赤色粒子を含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目。	11	7

第18表　18号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 4.1cm 口径 12.7cm	キメ細かく緻密。赤色粒子を含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。外面底部へう調整。	12	8
2	土師器	坏	器高 4.15cm 口径 11.3cm 底径 7.0cm	キメ細かい。赤色粒子を含む。	内面 暗茶色 外面 淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部へラ磨き。外面底部へラ削り。	12	8
3	土師器	鉢	器高 4.5cm 口径 7.4cm 底径 1.3cm	キメ細かく緻密。	黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	12	8
4	須恵器	坏	器高 3.7cm 口径 9.5cm 底径 4.9cm	キメ細かく緻密。	青灰色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部横方向のナデ。外面底部から体部にヘラ削り。外面底部に墨書。	12	8
5	土師器	高坏	器高 6.4cm 口径 10.2cm 底径 8.3cm	キメ細かく緻密。	暗茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面坏部及び脚部横方向のヘラ磨き。坏と脚部の接合部は縦方向のヘラ削り整形。	12	8
6	土師器	高坏	器高 11.0cm 口径 13.8cm 底径 12.7cm	キメ細かく緻密。	黒茶色	良好	口辺部及び裾部横ナデ仕上げ。内外面坏部横方向のヘラ磨き。脚部内外面縦方向のヘラ削り後、横方向のヘラ磨き。	12	8
7	土師器	甕	器高 8.0cm 口径 14.5cm 底径 4.8cm	キメ細かく緻密。	黒茶色	良	底部中心に直径23mmの凹孔。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部斜方向のハケ目。	12	8
8	土師器	甕	器高 10.4cm 口径 19.3cm 底径 8.6cm	キメ細かい。長石、石英を含む。	明茶褐色	良	底部中心に直径27mmの円孔。内面胴部横方向のハケ目。外面胴下半部横方向のハケ目。	12	8
9	土製品	紡錘車	長軸 4.25cm 短軸 2.45cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	中心に直径0.6cmの円孔を有す。孔を有す面はヘラ修形されている。	12	8
10	土師器	小型甕	器高 11.9cm 口径 12.6cm 底径 8.1cm	長石、石英、赤色粒子を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面胴部横方向のハケ目。底部木葉痕。	13	8
11	土師器	長胴甕	器高 25.8cm 口径 17.8cm 底径 6.3cm	長石、石英を含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面胴部縦方向のハケ目。外面胴部上半横方向のハケ目。	13	8
12	土師器	甕	現存器高 6.2cm 口径 24.7cm	長石、石英を含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。	13	8
13	土師器	壺	現存器高 9.35cm 底径 6.5cm	長石、石英を含む。	淡茶褐色	良	内面胴部に横方向のハケ目。	13	8
14	土師器	球胴甕	器高 25.4cm 口径 21.7cm 底径 9.5cm	長石、石英を含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部斜方向のハケ目。底部木葉痕。	13	8
15	土師器	球胴甕	現存器高 17.9cm 推定口径 18.8cm	長石、石英を含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部斜方向のハケ目。	13	8

第15～18表　住居跡出土遺物観察表5

No	器種	計測値（cm） 長軸	短軸	厚さ	素材	備考	挿図	図版
16	刀子	(7.5)	1.7	0.6	鉄		13	

第19表　19号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	須恵器	坏	器高 4.1cm 口径 15.3cm 底径 9.0cm	長石、石英を多く含む。	暗灰色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面底部ナデ仕上げ。	18	9
2	土師器	甕	現存器高 15.0cm 口径 15.4cm	長石、石英を多く含む。	明茶褐色	良	内面口辺部横方向の磨目。内面胴部横方向のヘラナデ仕上げ。外面胴部縦方向の磨目。	18	9

第20表　20号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 3.75cm 口径 12.45cm 底径 4.5cm	キメ細い。赤色粒子を含む	暗茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面胴部縦方向のヘラ磨き。	14	8
2	土師器	鉢	器高 10.0cm 口径 13.7cm 底径 2.2cm	長石、石英を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。	14	8
3	土師器	把手付甕	器高 11.0cm 口径 10.9cm 底径 5.8cm	赤色粒子を含む	暗茶褐色	良	口辺部及び内面胴部横ナデ仕上げ。外面胴部上半斜方向のハケ目。	14	8
4	土師器	小型甕	器高 14.2cm 口径 16.6cm 底径 7.3cm	長石を多く含む。	淡茶褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目。底部木葉痕。	14	8
5	土師器	小型甕	器高 18.3cm 口径 16.5cm 底径 8.1cm	長石、石英を含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部上半縦方向のハケ目。底部木葉痕。	14	8
6	土師器	長胴甕	器高 24.6cm 口径 17.8cm 底径 7.1cm	長石を多く含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部斜方向のハケ目。底部木葉痕。	14	8
7	土師器	長胴甕	器高 34.3cm 口径 21.4cm 底径 6.1cm	長石を多く含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目。底部木葉痕。	14	8

第21表　21号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師質土器	小型甕	現存器高 12.3cm 口径 16.0cm	長石、金雲母を含む。	暗茶褐色	良	内面口辺部横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目に一部横方向のハケ目が入る。	27	9
2	土師質土器	小皿	器高 2.95cm 口径 9.7cm 底径 5.8cm	金雲母を多く含む。	黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面底部に炭化物付着。底部糸切痕。	27	9
3	土師質土器	小型坏	器高 3.2cm 口径 9.1cm 底径 4.7cm	キメ細かい。金雲母を多く含む。	明茶褐色	良好	口辺部に灯明スス付着。底部糸切痕。ロクロ右回転。	27	9
4	土師質土器	坏	器高 4.7cm 口径 14.8cm 底径 6.6cm	キメ細かい。金雲母を多く含む。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	27	9
5	土師質土器	脚高高台坏	器高 5.2cm 口径 17.2cm 底径 7.5cm	キメ細かい。金雲母を多く含む。	暗茶色	良	高台と坏の接合部に横方向のヘラ整形。外面底部に4.5×3.5cmの補強用粘土を貼付。ロクロ右回転。	27	9
6	土師質土器	小壺	器高 3.9cm 口径 5.4cm 底径 3.9cm	キメ細かく緻密。金雲母を多く含む。	黒茶色	良好	内面口辺部横ナデ、底部糸切痕。	27	9
7	土師器	羽釜	現存器高 16.75cm 口径 28.8cm	石英、長石、金雲母を含む。	黒茶褐色	良	内面の口辺部から胴部に横方向のナデ仕上げ。外面胴部縦方向のヘラ磨き。	27	9

第22表　22号住居跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	長胴甕	器高 31.1cm 口径 20.4cm 底径 7.5cm	長石、石英を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のヘラナデ。底部木葉痕。	15	8
2	土師器	長胴甕	器高 31.8cm 口径 18.9cm 底径 5.8cm	長石、石英、赤色粒子を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目。底部木葉痕。	15	8

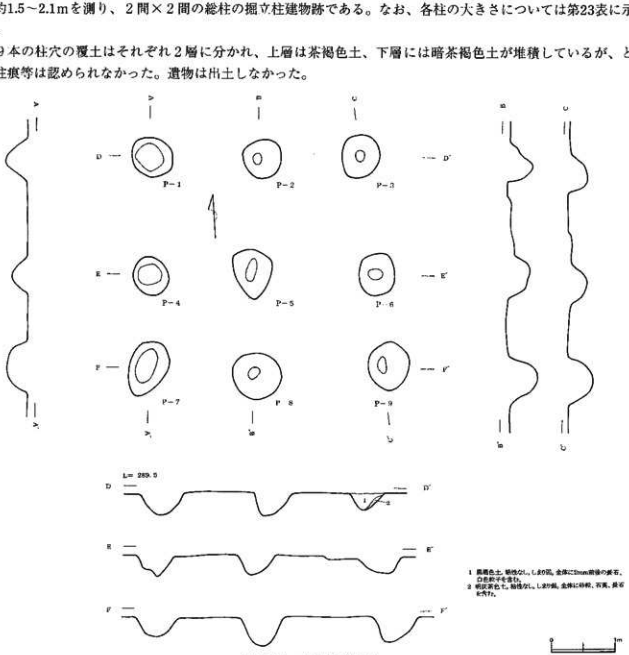
第18～22表　住居跡出土遺物観察表6

2．掘立柱建物跡（第29図、第23表、図版５－１）

本遺構は、C・D－１・２グリッドに位置する。２号溝状遺構と重複し、北東部に６号住居跡が隣接している。

計９本の柱穴が確認され、規模約3.4×3.8m、面積約13㎡で南北を主軸とみるとほぼ真北を示している。１間が約1.5～2.1mを測り、２間×２間の総柱の掘立柱建物跡である。なお、各柱の大きさについては第23表に示した。

９本の柱穴の覆土はそれぞれ２層に分かれ、上層は茶褐色土、下層には暗茶褐色土が堆積しているが、とくに柱痕等は認められなかった。遺物は出土しなかった。



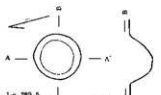
第29図　掘立柱建物跡

第23表　掘建柱建物跡

No	大きさ（cm）			備考
	長径	短径	深さ	
P－1	70	62	34	
P－2	63	63	39	
P－3	71	61	30	
P－4	64	54	27	
P－5	80	63	33	
P－6	67	56	26	
P－7	92	59	30	
P－8	78	73	48	
P－9	79	65	40	

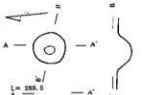
3．土坑（第30～32図、第24～26表、図版5・6・10）

計13基の土坑が発見された。中には、9・12号土坑のように遺物が豊富に出土しているものがある。9号土坑では土師質土器が中心で柱状高台の小皿、小皿、坏等がみられ、12号土坑からは台付甕や壺、甕などが出土している。



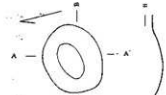
1号土坑

1 黒褐色土。粘性なし。しまり弱。金属に2mm前後の黄灰、白色粒子を含む。
2 明灰茶色土。粘性なし。しまり弱。ややに砂粒、石英、炭化を含む。



2号土坑

1 黒褐色土。粘性なし。しまり弱。金属に2mm前後の黄灰、白色粒子及び5mm前後の黄色粒子を含む。
2 暗茶色土。粘性なし。しまり弱。砂粒、1～2mm前後の礫を含む。

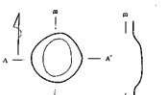


3号土坑

1 黒褐色土。粘性なし。しまり弱。金属に5mm前後の小礫、白色粒子を含む。
2 明灰茶色土。粘性なし。しまりやや。やや多く含む。

4号土坑

1 黒褐色土。粘性弱。しまやや。まばらに白色粒子、黄色粒子微を含む。
2 暗茶褐色土。粘性なし。しまり弱。金属に2mm前後の黄灰、砂粒を含む。

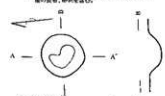


5号土坑

1 黒褐色土。粘性弱。しまり強。砂粒、白色粒子やや含。

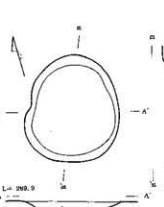
6号土坑

1 黒褐色土。粘性強。しまり強。金属に炭化物を多く含む。白色粒子を少量含む。
2 灰褐色土。粘性強。しまり強。5～10mm前後の礫を多く含む。



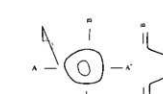
7号土坑

1 黒褐色土。粘性弱。しまり強。砂粒、小石、少量の白色粒子を含む。



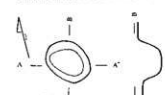
9号土坑

1 黒褐色土。粘性強。しまり弱。小石に2mm前後の小礫を含む。
2 暗褐色土。粘性弱。しまり強。金属に焼土及び炭化物を含む。



10号土坑

1 黒褐色土。粘性なし。しまり弱。小石に焼土粒が多く含む。

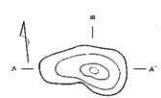


8号土坑

1 暗茶褐色土。粘性強。しまり強。金属に炭化物を含む。
2 暗灰褐色土。粘性強。しまり強。炭化物を含む。

11号土坑

1 暗茶褐色土。粘性中。しまり弱。小石に砂粒を含む。
2 黒茶色土。粘性強。しまり弱。
3 黒褐色土。粘性強。しまり弱。小石に炭化、焼粒子を含む。



12号土坑

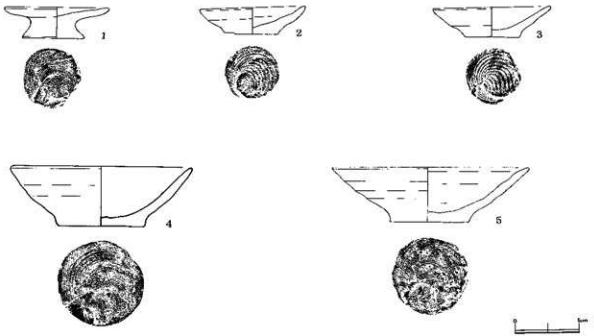
1 黒褐色土。粘性強。しまり弱。白色粒子を含む。
2 黒褐色土。粘性強。しまり弱。白色粒子、石英、炭化を含む。

13号土坑

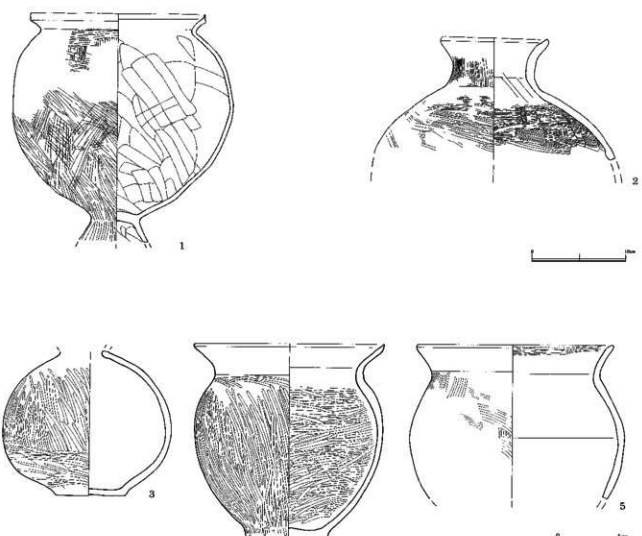
1 明褐色土。粘性弱。しまり強。金属に細く焼土含む。
2 灰褐色土。粘性弱。しまり強。金属に2mm前後の小礫を含む。
3 黒褐色土。粘性弱。しまり強。金属に白色粒子を含む。

0 1m

第30図　1～13号土坑



第31図　9号土坑出土遺物



第32図　12号土坑出土遺物

第24表　土坑一覧

No	グリッド	形　状	規　模（cm）			備　考	図版No
			長径	短径	深さ		
1号	D－2	円　形	80	75	40		5
2号	D－2	円　形	55	55	20		5
3号	D－2	円　形	115	110	15		5
4号	D－15	楕円形	80	60	30		5
5号	H－1	円　形	90	80	15		5
6号	A－6	楕円形	135	110	35		5
7号	C－2	円　形	70	70	20		
8号	G－7	円　形	70	70	35		
9号	A'－16	不整形	180	160	35	柱状高台小皿、上師器皿、坏など出土	5
10号	E－15	楕円形	60	60	45		5
11号	C－15	不整形	170	135	30	11号住居跡と重複	5
12号	H－0	不整形	145	80	40	台付甕、壷、甕など出土	6
13号	B－15	楕円形	90	80	50		6

第25表　9号土坑出土遺物

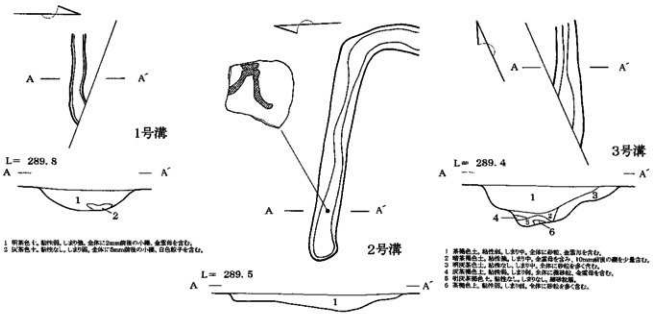
No	器　種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼　成	器　形　の　特　徴	挿図	図版
1	土師質土器	柱状高台　皿	器　高　2.6cm 口　径　8.2cm 底　径　4.8cm	金雲母を多く含む。	黒茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	31	10
2	土師質土器	小皿	器　高　2.3cm 口　径　8.2cm 底　径　4.2cm	金雲母を多く含む。	暗茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	31	10
3	土師質土器	小皿	器　高　2.5cm 口　径　9.1cm 底　径　4.4cm	金雲母を多く含む。	暗茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	31	10
4	土師質土器	坏	器高推定　4.8cm 口　径　14.4cm 底　径　6.9cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	31	10
5	土師質土器	坏	器　高　4.4cm 口　径　15.6cm 底　径　6.4cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良	内面口辺部灯明スス付着。口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	31	10

第26表　12号土坑出土遺物

No	器　種	器　形	計　測　値	胎　土	色　調	焼　成	器　形　の　特　徴	挿図	図版
1	土師器	S字状口縁台付甕	器　高　24.5cm 口　径　18.4cm	長石、石英を含む。	暗赤褐色	良	外面頸部横方向のヘラ日。外面胴部は不規則なハケ日。外面胴下半部から脚台部は縦方向のハケ日。内面口辺部横方向のハケ日。	32	10
2	土師器	壷	現存器高　12.6cm 口　径　10.8cm	石英を含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面頸部縦方向のハケ目。内外面胴部横方向のハケ目。	32	10
3	土師器	小型壷	現存器高　11.6cm 最大胴径　13.5cm 底　径　2.6cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	外面胴部斜め方向のヘラ磨き。外面胴下半部から底部にかけて横方向のヘラ磨き。	32	10
4	土師器	小型壷	器　高　16.2cm 口　径　14.8cm 底　径　6.4cm	長石、石英を含む。	黒茶色	良	外面胴部縦方向のヘラ磨き。内面胴部横方向のヘラ磨き。	32	10
5	土師器	甕	推定口径　15.5cm	赤色粒子を含む。	暗茶褐色	良好	外面胴部縦方向のハケ日に一部横方向のハケ目が入る。内面口辺部から胴部に横方向のハケ目。	32	10

4．溝状遺構（第33図、第27～29表、図版6）

計6条の溝状遺構が発見された。調査区西側の旧河道跡の影響で2・3号は壊されている。4号は旧河道跡で堆積した砂利や石を取り除いたところ発見され、旧河道ができる以前にすでに構築されていたものであろう。



1 明黄色土。粘性弱、しまり強、全体に2mm前後の小礫、金雲母を含む。
2 灰黄色土。粘性なし、しまり強、全体に7mm前後の小礫、白色粒子を含む。

1 黒褐色土。粘性弱、しまり強、全体に礫多量、雲母を含む。

1 茶褐色土。粘性弱、しまり中、全体に炭粒、金雲母を含む。
2 暗茶褐色土。粘性強、しまり中、全体的な含む。10mm前後の礫を少量含む。
3 明灰色土。粘性なし、しまり中、全体に炭粒を多く含む。
4 灰黄褐色土。粘性なし、しまり中、全体に炭粒、金雲母を含む。
5 明灰黄褐色土。粘性なし、しまりなし、鉄分粒。
6 茶褐色土。粘性弱、しまり弱、全体に炭粒を多く含む。

1 黒茶色土。粘性中、しまり強、5～20mmの礫を含む。
2 明茶褐色土。粘性弱、しまり弱、80～100mmの礫を多量に含む。

1 茶褐色土。粘性なし、しまり弱、全体に鉄分粒を含む。
2 白色砂粒層。粘性なし、しまりなし。

1 明灰茶色土。粘性弱、しまり中、鉄分粒を多く含む。
2 明灰褐色土。粘性なし、しまりなし、炭化、石英を含む鉄分粒層。
3 暗灰茶色土。粘性なし、しまりなし、炭化、石英を含む鉄分粒層。
4 灰褐色土。粘性なし、しまりなし、炭化、石英を含む鉄分粒層。
5 明褐色土。粘性なし、しまりなし、炭化物、20mm前後の礫を含む鉄分粒層。
6 灰茶褐色土。粘性強、しまり強、鉄分粒。
7 灰茶褐色土。粘性なし、しまりなし、炭化、石英を含む鉄分粒層。
8 明褐茶褐色土。粘性なし、しまりなし、炭化、石英、10mm前後の礫を含む鉄分粒層。
9 灰褐色土。粘性なし、しまりなし、鉄分粒。
10 暗灰茶褐色土。粘性強、しまり強、鉄分粒。
11 暗灰色土。粘性強、しまり中、鉄分粒層。
12 灰褐色土。粘性弱、しまり中、1mm前後の長石を含む鉄分層。
13 明灰色土。粘性なし、しまり強、炭化、石英を含む鉄分粒層。
14 明灰褐色土。粘性なし、しまりなし、鉄分粒層。

第33図　1～6号溝状遺構（平面1/200、断面1/30）・出土遺物（1/2）

第27表　溝状遺構一覧

No.	グリッド	規模（cm） 長径	短径	深さ	備考	図版No.
1号	A'－2	4.3	0.9	0.16		6
2号	C－1・3 D－2・3	14.6	1.7	0.13		6
3号	G・H－1	6.6	1.5	0.33		6
4号	A－6～8 B－5・6 C－4・5	19.5	2.26	0.59		6
5号	A'－6・7 A－5～7 B－4・5 C－4	16.7	1.0	0.18		6
6号	E・F・G－9	8.0	2.4	0.43		6

第28表　2号溝状遺構出土遺物

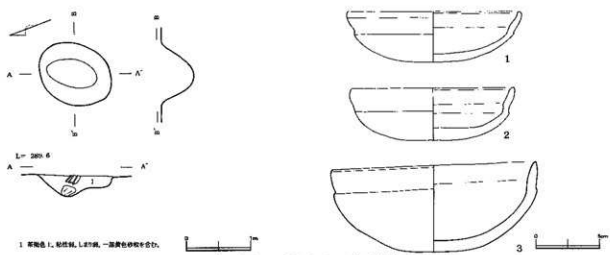
No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏		キメ細かい。	明茶褐色	良	外面底部に墨書。	33	

第29表　5号溝状遺構出土遺物

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土製品	丸玉	長軸 1.7cm 最大径 2.15cm	長石、石英を含む。	黒茶色	良	玉のやや中心に直径0.3cmの円孔を持つ。	33	

5．ピット（第34図、第30表、図版5・10）

計25個のピットが確認された。これらは、1号掘立柱建物跡のように規則的に並ぶようなものはなく、用途は不明である。遺物は25号ピットから3点の坏が出土しており、しかも3点が重った状態となって出土した。



第34図　25号ピット・出土遺物

第30表　25号ピット出土遺物

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 4.1cm 口径 13.6cm	キメ細かく緻密。	暗茶色	良好	3枚重ねの上。口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	34	10
2	土師器	坏	器高 4.2cm 口径 12.8cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	3枚重ねの中。口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	34	10
3	土師器	坏	器高 7.3cm 口径 15.9cm	キメ細かい。	明茶褐色	良好	3枚重ねの下。口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	34	10

第３章　遺構外出土遺物

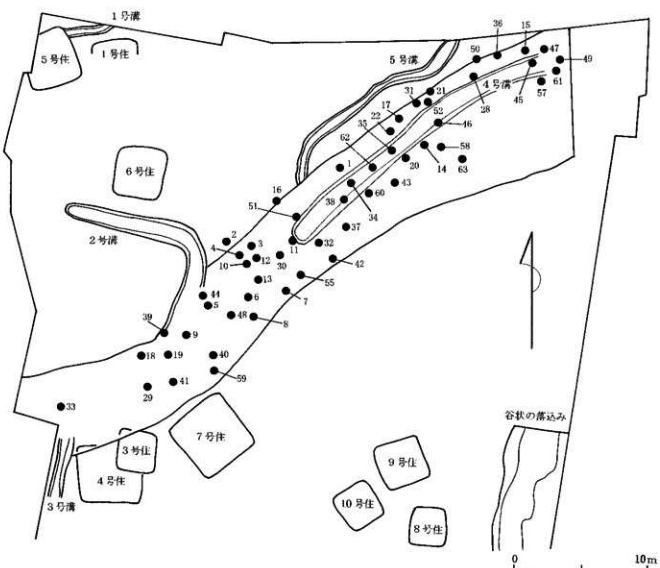
１．旧河道跡（第３・35～39図、第31～34表、図版１・10）

調査区の北西部Ａ－７・８、Ｂ－５～８、Ｃ－４～６、Ｄ－３～５、Ｅ－２～４、Ｆ－１～３グリッドに位置し、概してその上層は拳大から人頭大にかけての大型の石で、下層は砂利混じりの砂質土で構成されていた。

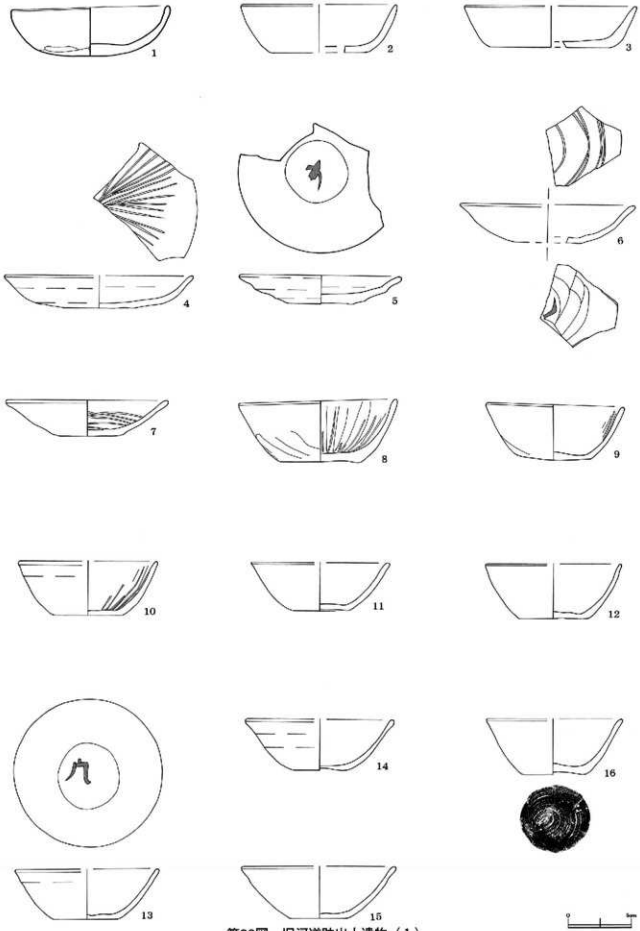
また、本河道跡は２・３号溝状遺構を切っており、４号溝状遺構は本河道の下から確認されている。

この河道は古代の荒川の氾濫跡と考えられ、今回調査した３・４号住居跡は２軒ともその北西部に河道跡が被った痕跡が確認されている。しかし、古墳時代の４号住居跡の覆土内には石や砂利などの河道による影響はみられないが、平安時代の３号住居跡は覆土中から床面上にかけ砂利交じりの上質が流れ込んでいた。このことから、本河道跡は古墳時代の後期にはまだ形成されておらず、少なくとも平安時代以降において起こった氾濫の痕跡であると考えられる。

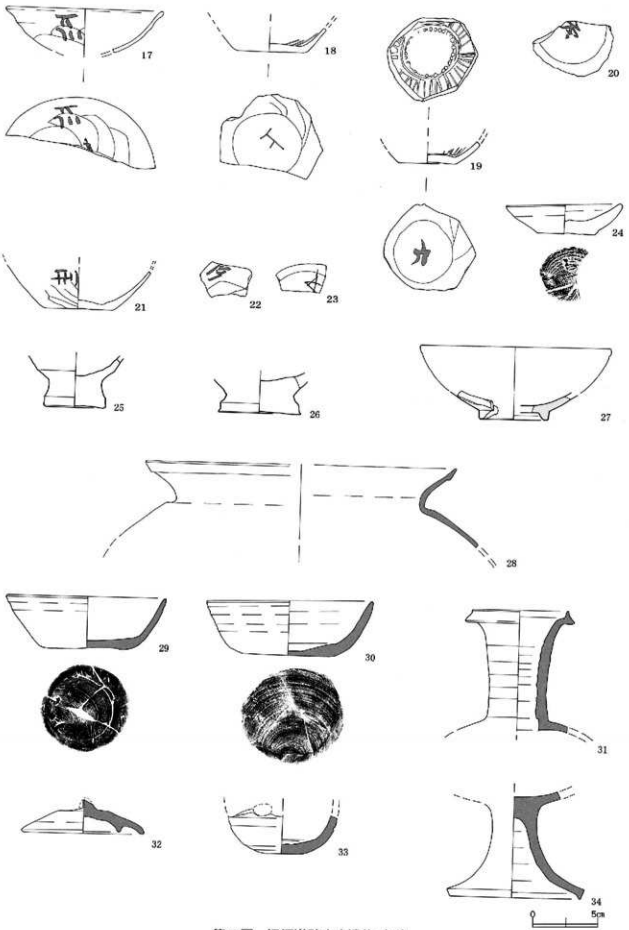
遺物は、縄文時代から平安時代頃のものが河道跡の北から南にかけてのほぼ全面で出土しているが、中でも平安時代相当のものが最も多く出土する傾向にあった。代表的なものを第35～39図に掲載した。



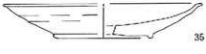
第35図　旧河道跡出土遺物分布図

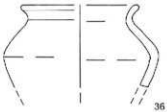


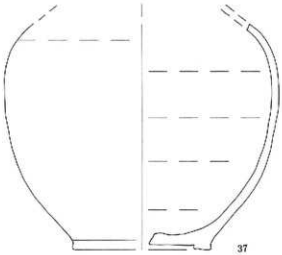
第36図　旧河道跡出土遺物（1）

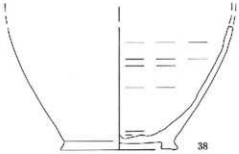


第37図　旧河道跡出土遺物（２）


35


36


37


38

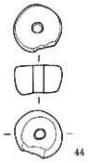
39

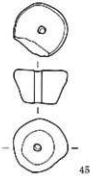
40

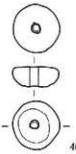
41

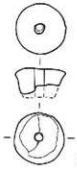
42

43


44


45


46

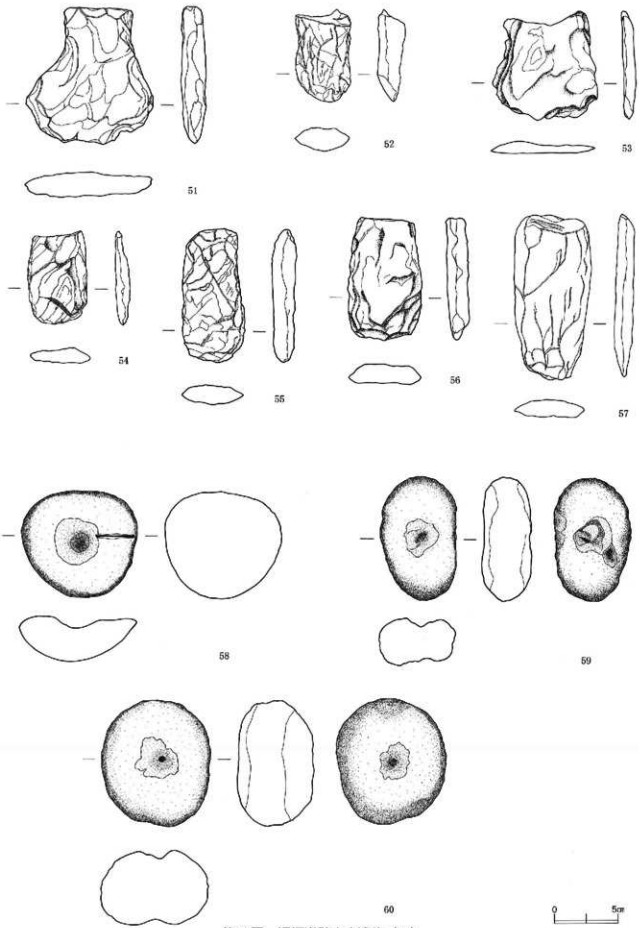

47

48

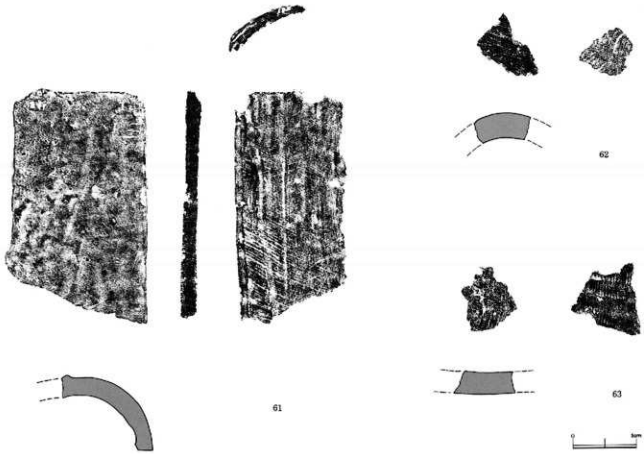
49

50

第38図　旧河道跡出土遺物（3）



第39図　旧河道跡出土遺物（4）

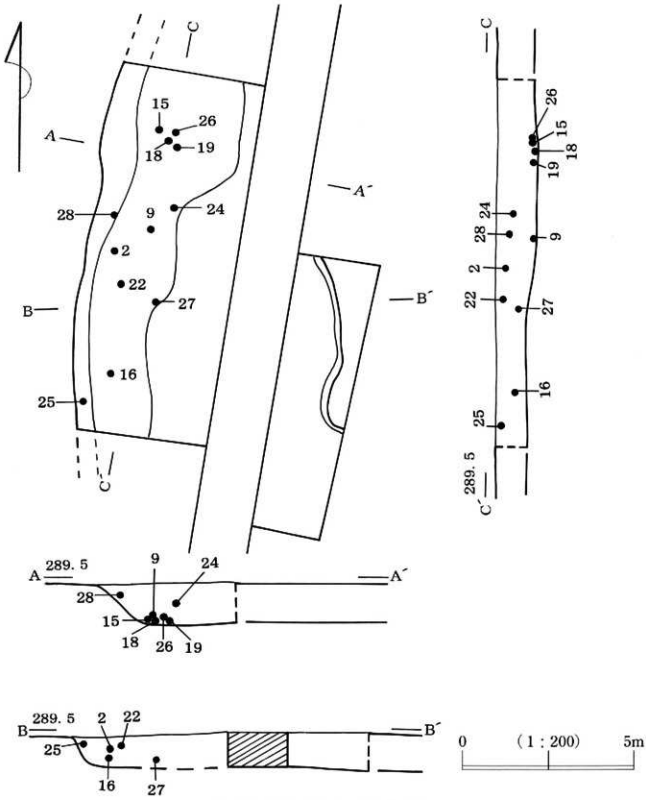


第40図　旧河道跡出土遺物（５）

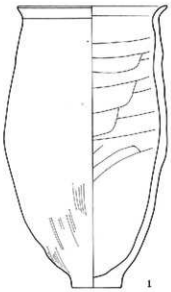
2．谷状の落ち込み（第３・40～43図、第35～37表、図版11）

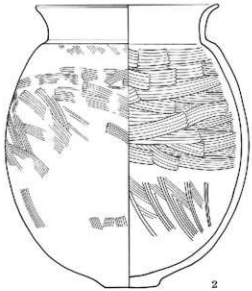
調査区の中央南部、Ｆ－８・９、Ｇ－７～９、Ｈ－７～９、Ｉ－８・９グリッド周辺で確認された。調査をおこなった西側では谷の立ち上がりとなる傾斜面が南北にわたって確認されているが、東側では不明である。

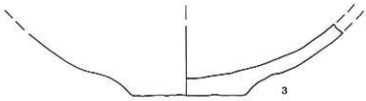
遺物は上層から平安時代を中心としたものが出土し、下層から底面にかけて古墳時代後期のものがまとまっている。

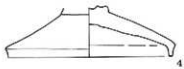


第41図　谷状の落ち込み遺物分布図

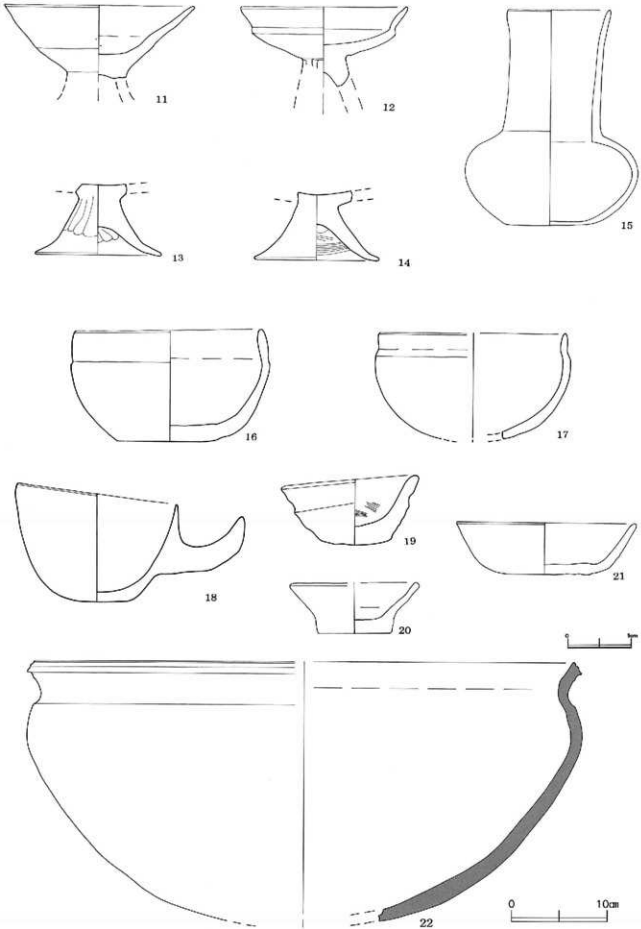




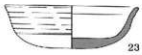


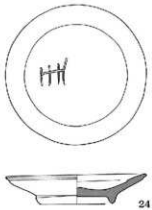


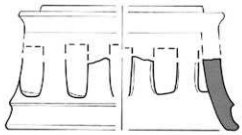
第42図　谷状の落ち込み出土遺物（1）

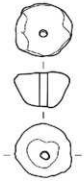


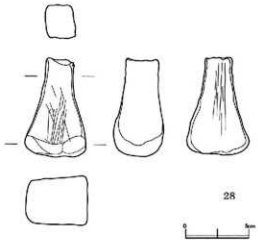
第43図　谷状の落ち込み出土遺物（２）











第44図　谷状の落ち込み出土遺物（3）

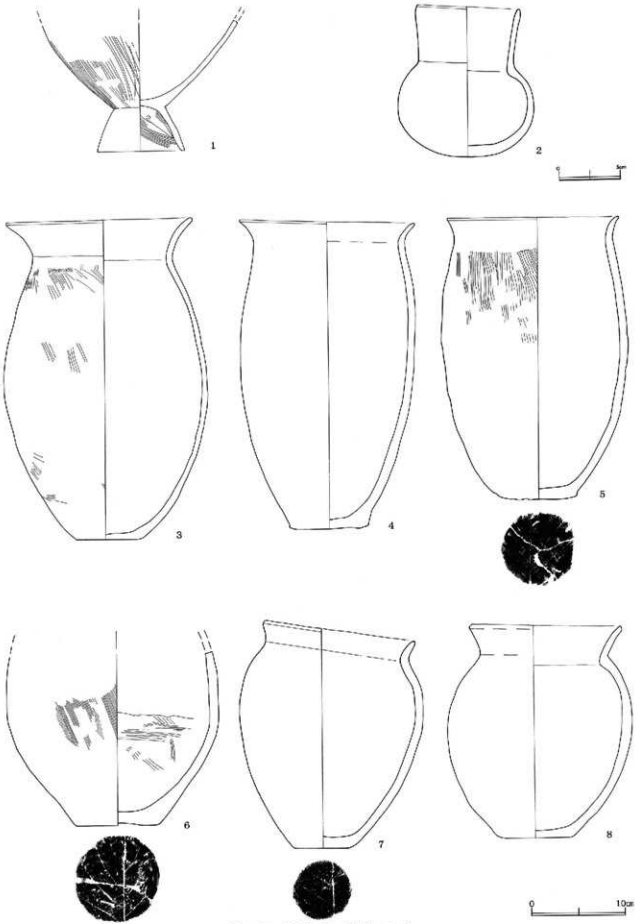
3．その他の遺構外遺物（第44～52図、第38～41表、図版11～13）

調査区内の遺構外からは、縄文時代から平安時代までに至る多くの遺物が採取されている。そして、中でも今回の調査で遺構が確認可能であった古墳時代～平安時代のものが主体である（第43～50図）。

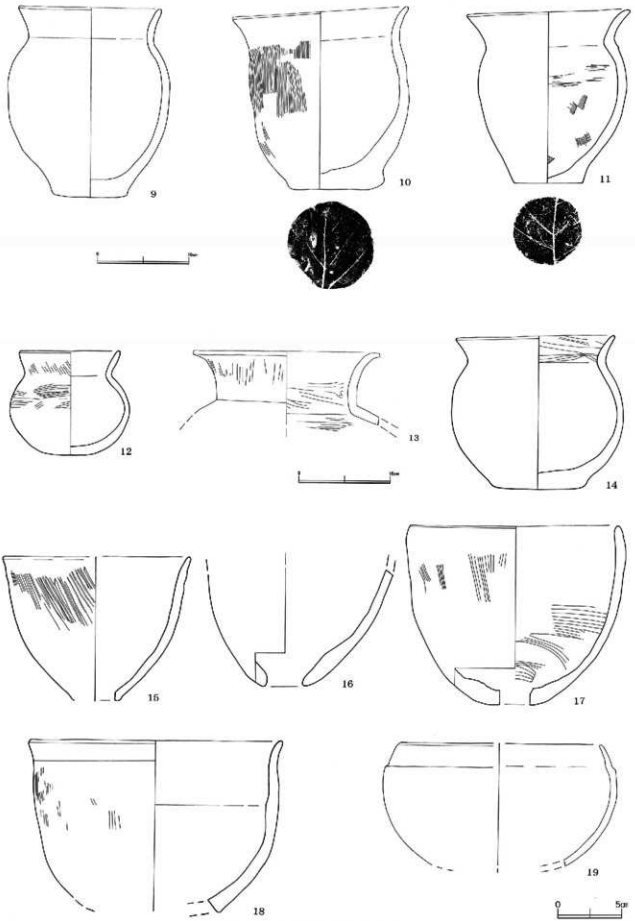
古墳時代では、前期に相当する台付甕が10号住居跡付近から出土し、調査区北西部のA－2とA'－2のちょうど境となる付近からは26～28の大中小の脚を欠いた高坏の坏部がまとまっており、そのすぐ西隣からは81の土鈴が出土している。このほか、調査区内から後期の遺物が数多くみられる。

平安時代（9～11世紀）の遺物には皿・坏・土師質土器・羽釜・陶磁器などが多く出土している。さらに、円面硯の破片が2個体あり、旧河道跡近辺のA－7（60）とF－1（61）グリッドから出土している。

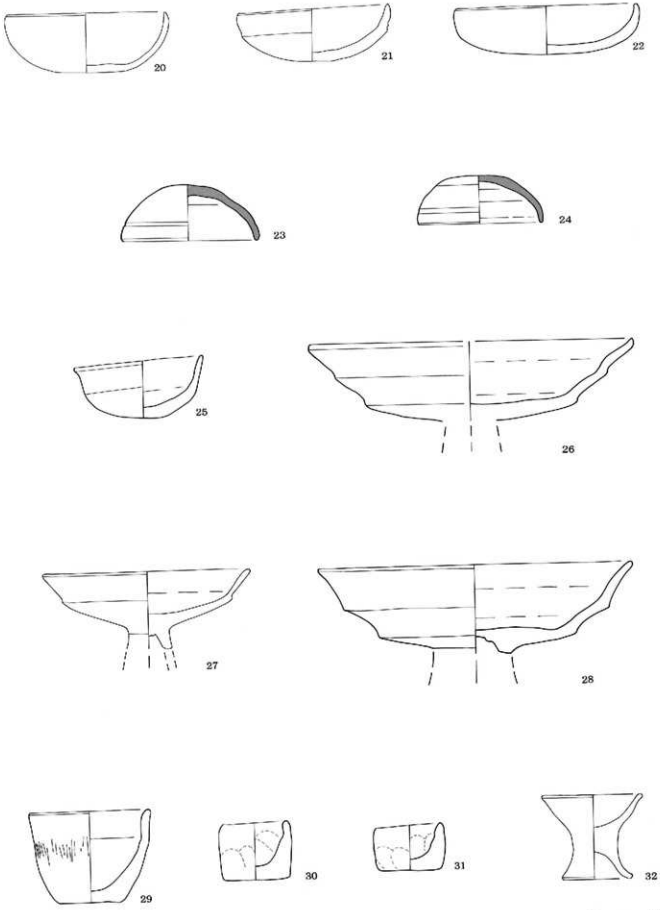
第45図　遺構外遺物分布図



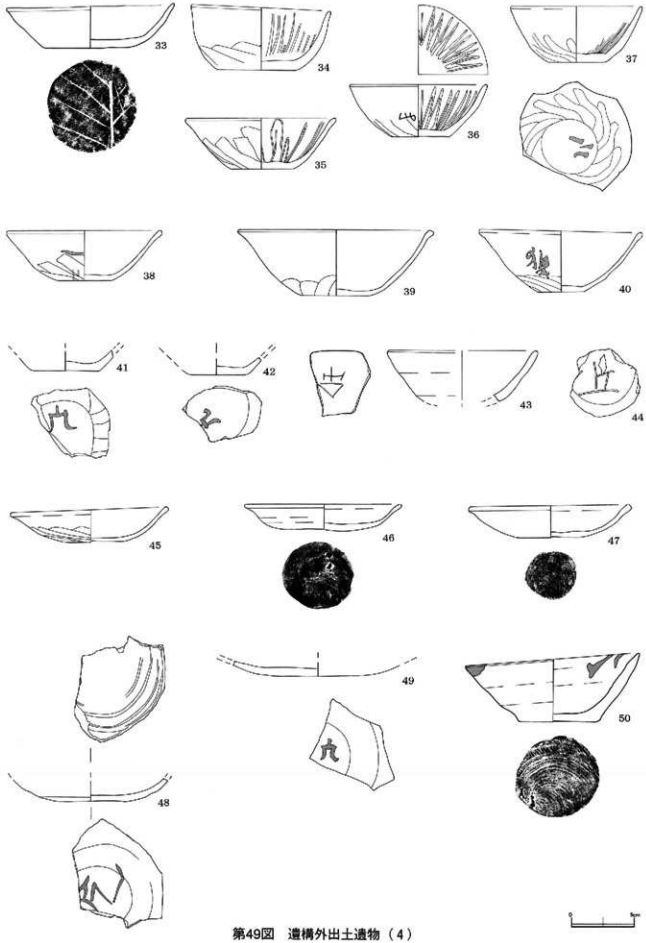
第46図　遺構外出土遺物（1）



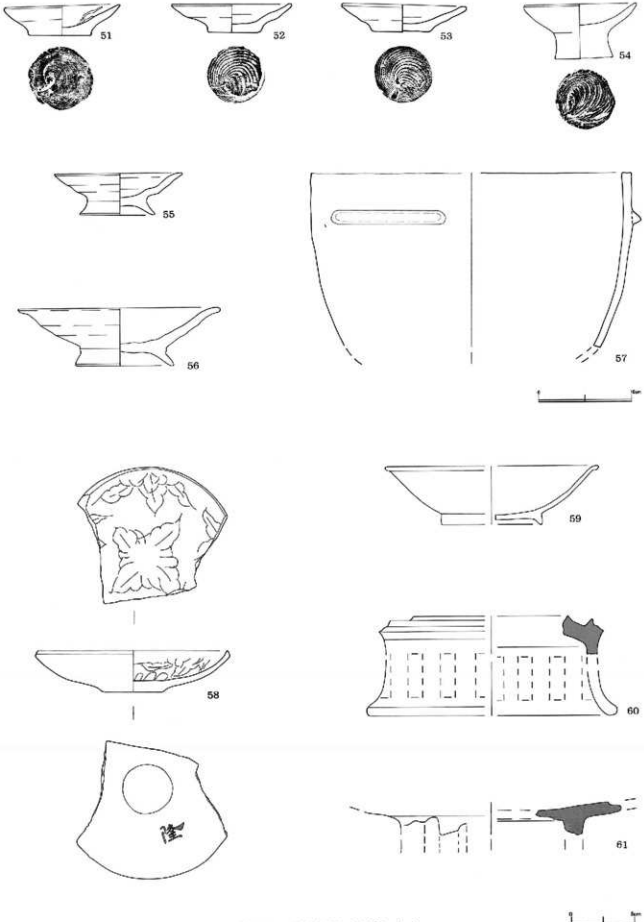
第47図　遺構外出土遺物（2）



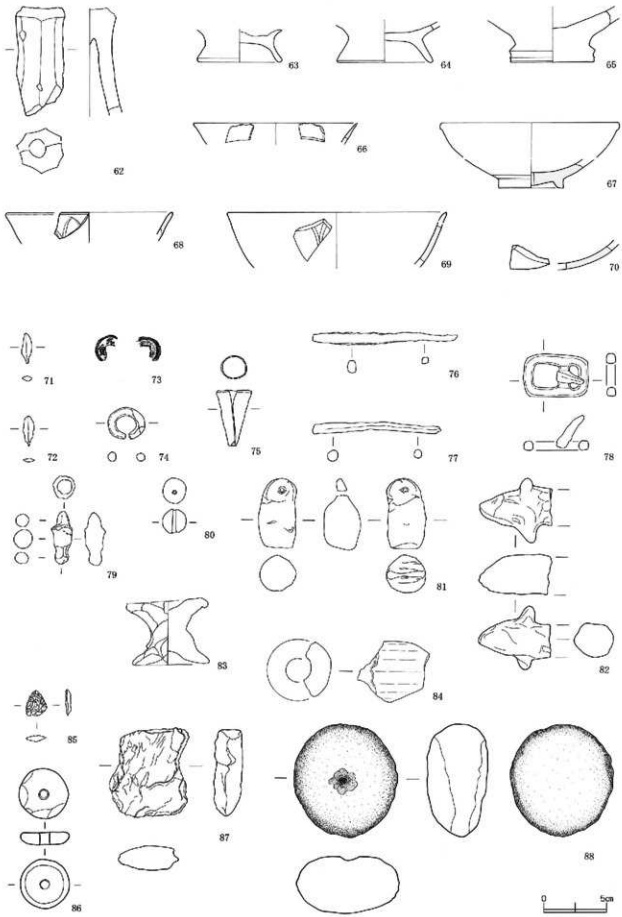
第48図　遺構外出土遺物（3）



第49図　遺構外出土遺物（4）



第50図　遺構外出土遺物（5）



第51図　遺構外出土遺物（6）

第31表　旧河道跡出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	坏	器高 4.1cm 口径 12.4cm 底径 4.2cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半ヘラ削り。外面底部ヘラナデ仕上げ。	36	10
2	土師器	坏	器高 4.4cm 推定口径 12.2cm 推定底径 8.4cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半横方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	36	10
3	土師器	坏	器高推定 3.3cm 口径推定 13.5cm 底径 9.5cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部ヘラ整形。	36	10
4	土師器	皿	器高 2.6cm 口径 15.0cm 底径 5.8cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面に放射状暗文が施される。外面底部及び体部下半ヘラ整形。	36	10
5	土師器	皿	器高 2.3cm 推定口径 12.7cm 底径 5.2cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	外面底部に墨書有り。外面体部下半ヘラ整形が一周する。	36	10・14
6	土師器	皿	器高推定 3.1cm 口径推定 13.6cm 底径 5.4cm	キメ細かい。	明茶褐色	良	内面底部に墨書有り。外面底部ヘラ整形。内面体部横方向の暗文有り。	36	14
7	土師器	皿	器高 2.9cm 口径 12.8cm 底径 5.6cm	キメ細かい。赤色粒子を含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部横方向の暗文有り。外面底部ヘラ調整。	36	10
8	土師器	坏	器高 5.15cm 口径 12.4cm 底径 6.5cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部に放射状暗文が施される。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切痕。	36	10
9	土師器	坏	器高 4.7cm 口径 10.7cm 底径 5.8cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部に放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	36	10
10	土師器	坏	器高推定 4.35cm 口径推定 11.0cm 底径 5.5cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部に放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	36	
11	土師器	坏	器高 3.9cm 推定口径 11.0cm 底径 4.8cm	キメ細かい。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切り後、ヘラ整形。	36	10
12	土師器	坏	器高 4.4cm 推定口径 10.6cm 底径 5.6cm	キメ細かい。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部及び体部下半ヘラ整形。ロクロ右回転。	36	10
13	土師器	坏	器高 4.1cm 推定口径 11.5cm 底径 5.2cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	外面底部に墨書有り。口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切り後、ヘラ整形。	36	10・14
14	土師器	坏	器高推定 4.1cm 口径推定 11.6cm 底径 4.4cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切痕。	36	10
15	土師器	坏	器高推定 4.2cm 口径推定 12.1cm 底径 4.6cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切痕。	36	10
16	土師器	坏	器高 4.5cm 推定口径 10.6cm 底径 5.5cm	キメ細かく緻密。	淡白茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切痕。	36	10
17	土師器	坏	現存器高 3.5cm 推定口径 12.5cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	外面体部に逆位で墨書有り。口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。	37	14
18	土師器	坏	現存器高 2.1cm 底径 5.5cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	外面底部に刻書有り。内面体部に放射状暗文。外面体部下半ヘラ削り。	37	14
19	土師器	坏	現存器高 1.9cm 底径 4.8cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	外面底部に墨書有り。内面体部に放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切り後、ヘラ整形。	37	10・14
20	土師器	坏		キメ細かい。	明茶褐色	良	外面底部に墨書有り。	37	14
21	土師器	坏	現存器高 3.5cm 底径 5.6cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	外面体部に正位で墨書有り。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切り後、ヘラ整形。	37	14
22	土師器	坏		キメ細かい。	淡茶褐色	良	外面体部下半に墨書有り。	37	14
23	土師器	坏		キメ細かい。	淡茶褐色	良	外面底部に刻書有り。	37	14
24	土師質土器	小皿	器高 2.6cm 口径 9.2cm 底径 4.7cm	金雲母を多く含む。	暗茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	37	
25	土師質土器	柱状高台付坏	底径 6.6cm	金雲母を多く含む。	暗茶褐色	良	底部糸切り痕。	37	
26	土師質土器	柱状高台付坏	底径 5.0cm	金雲母を含む。	茶褐色	良好	底部糸切り痕。	37	

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
27	白磁	碗	推定底径 5.4cm	キメ細かい。	灰白色	良好	大宰府編年の「白磁碗Ⅱ類」に相当。	37	カラー図版
28	須恵器	壺	現存器高 6.4cm 推定口径 25.0cm	キメ細かい。長石、石英を含む。	灰黒色	良好	口辺部及び胴部横ナデ仕上げ。外面頂部斜め方向のヘラ磨き。外面肩部縦方向のハケ目。	37	10
29	須恵器	坏	器　高 4.3cm 推定口径 12.8cm 底　径 6.5cm	キメ細かく緻密。	淡灰茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。	37	10
30	須恵器	坏	器　高 4.6cm 口　径 13.3cm 底　径 7.0cm	キメ細かく緻密。	淡灰色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部と底部の間を横方向のヘラ削り。底部糸切痕。ロクロ右回転。	37	10
31	須恵器	長頸瓶	現存器高 10.0cm 口　径 7.6cm	キメ細かく緻密。	暗灰色	良好	口辺部及び外面頸部横ナデ仕上げ。	37	10
32	須恵器	蓋	現存器高 2.75cm 推定口径 9.8cm	キメ細かく緻密。	淡灰色	良好	一部欠損。外面中部上半ヘラ整形。口辺部横ナデ仕上げ。外面全体に自然釉付着。	37	10
33	須恵器	鼠	現存器高 3.0cm 底　径 2.2cm	キメ細かく緻密。	明灰色	良好	胴部に直径約1.5cmの円孔が穿たれている。	37	10
34	須恵器	高坏	現存器高 8.3cm 底　径 10.4cm	キメ細かく緻密。	灰白色	良好	内面坏底部及び外面脚裾部に自然釉付着。	37	10
35	灰釉陶器	皿	器高推定 2.8cm 口径推定 15.2cm 底　径 8.0cm	キメ細かく緻密。	内面 淡緑色 外面 灰白色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部に自然釉付着。	38	10
36	灰釉陶器	小型壺	現存器高 6.7cm 推定口径 9.2cm	キメ細かく緻密。	内面 紫灰色 外面 暗緑灰色	良好	口辺部及び内面胴部横方向のナデ仕上げ。内面口辺部と外面全体に施釉されている。	38	10
37	灰釉陶器	壺	現存器高 16.0cm 底　径 11.0cm	キメ細かく緻密。	内面 淡灰色 外面 暗茶色	良好	外面胴部に緑色の自然釉付着。	38	10
38	灰釉陶器		現存器高 9.9cm 底　径 9.4cm	キメ細かく緻密。	灰白色	良好	内面底部と外面胴部に淡緑色の自然釉付着。	38	10
39	手捏ね土器		器　高 2.3cm 口　径 3.3cm 底　径 3.8cm	キメやや粗く、長石・石英を含む。	茶褐色	良	体部全体を横ナデ仕上げ。	38	10
40	手捏ね土器		器　高 4.7cm 口　径 6.1cm 底　径 4.1cm	キメやや粗く、長石・雲母を含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部にヘラ整形痕あり。底部本葉痕。	38	10

第32表　旧河道跡出土の土製品

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
41	土錘		長　軸 3.75cm 短　軸 1.65cm	キメ細かく緻密。	淡褐色	良好	直径3.5mmの円孔。	38	10
42	土錘		長　軸 4.4cm 短　軸 1.45cm	キメ細かく緻密。	白茶色	良好	直径5mmの円孔。	38	10
43	土錘		長　軸 4.7cm 短　軸 1.5cm	キメ細かく緻密。	白茶色	良好	直径3.5mmの円孔。	38	10
44	紡錘車		厚　さ 2.3cm 直　径 3.8cm	長石、石英を含む。	淡茶色	良	中心に直径0.8cmの円孔が穿たれている。	38	10
45	紡錘車		厚　さ 2.7cm 直　径 4.4cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	中心に直径5mmの円孔が穿たれている。	38	10

第33表　旧河道跡出土の石製品

No	器種	計測値（cm） 長軸	計測値（cm） 短軸	素材	備考	挿図	図版
46	紡錘車	3.8	1.6	片岩		38	10
47	紡錘車	3.95	2.1	片岩		38	10

第34表　旧河道跡出土の石器

No	器種	計測値（cm） 最大長	最大幅	最大厚	石質	備考	挿図	図版
48	石錐	2.0	1.6	0.3	黒曜石	無茎。	38	10
49	石錐	1.6	1.4	0.35	黒曜石	無茎。	38	10
50	石錐	1.8	1.2	0.3	黒曜石	無茎。	38	10
51	打製石斧	11.1	10.2	2.0	粘板岩		39	10
52	打製石斧	7.5	4.4	1.8	砂岩		39	10
53	打製石斧	8.8	8.35	0.95	粘板岩		39	10
54	打製石斧	7.6	4.7	1.2	片岩		39	10
55	打製石斧	10.8	5.0	1.8	粘板岩		39	10

No	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	石質	備考	挿図	図版
56	打製石斧	9.8	6.0	1.5	片岩		39	10
57	打製石斧	13.2	6.1	1.4	片岩		39	10
58	凹石	8.6	9.3	3.5	安山岩		39	10
59	凹石	10.0	6.0	3.9	安山岩		39	10
60	凹石	10.0	8.8	6.0	安山岩		39	10

第35表　旧河道跡出土の瓦

No	器種	計測値(cm) 最大長×最大幅×最大厚	胎土	色調	焼成	特徴	グリッド	挿図
61	男瓦	18.5×7.4×1.5	粗、長石、石英	暗橙褐色	良好	布目。赤色粒子を多く含む。	A－8	40
62	男瓦	5.1×4.5×2.0	粗、長石、石英	暗橙褐色	良好	布目。赤色粒子を多く含む。	B－5	40
63	女瓦	6.3×5.6×1.8	粗、長石、石英	灰褐色	良好	叩き目、布目。	B－7	40

第36表　谷状の落ち込み出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
1	土師器	長胴甕	器高 30.1cm 口径 15.7cm 底径 5.3cm	キメやや粗く、長石・石英を含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のヘラナデ。	42	11
2	土師器	甕	器高 30.2cm 口径 18.7cm 底径 5.0cm	キメやや粗く、石英・雲母を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面胴部斜め方向のハケ目。外面頸部横方向のハケ整形。	42	11
3	土師器	甕	現存器高 5.6cm 底径 8.8cm	キメやや粗く、長石・石英を含む。	茶褐色	良	底部木葉痕あり。	42	
4	土師器	盌	現存器高 4.1cm 口径 13.5cm	キメ細かく緻密。	内面 黒色 外面 淡茶褐色	良好	内黒土器。内面の磨滅著しい。内面甲部横方向のヘラ磨き。外面甲部横方向のハケ目。	42	11
5	土師器	皿	器高 3.3cm 口径 15.8cm 底径 7.5cm	長石・石英を含む。	内面 黒色 外面 淡茶色	良好	内黒土器。口辺部横ナデ仕上げ。	42	11
6	土師器	鉢	推定器高 5.7cm 推定口径 14.0cm	キメ細かく緻密。金雲母を含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	42	11
7	土師器	坏	器高推定 3.1cm 口径推定 13.0cm 底径 10.0cm	赤色粒子を含む。	赤褐色	良好	内面・外面に朱が施されている。口辺部横ナデ仕上げ。	42	11
8	土師器	坏	器高推定 3.9cm 口径推定 12.0cm 底径 3.5cm	キメ細かく緻密。	内面 赤褐色 外面 淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。	42	11
9	土師器	坏	器高 4.15cm 口径 12.7cm 底径 4.7cm	キメ細かく緻密。	暗茶褐色	良好	外面底部繊刻あり。口辺部横ナデ仕上げ。内外面ともにナデ仕上げ。	42	
10	土師器	坏	器高推定 2.9cm 口径推定 14.2cm 底径 6.0cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	42	
11	土師器	高坏	現存器高 5.8cm 推定口径 15.3cm	長石・石英・赤色粒子を含む。	内面 黒色 外面 淡赤褐色	良好	内黒土器。外面体部に朱が施されている。口辺部横ナデ仕上げ。	43	11
12	土師器	高坏	現存器高 6.4cm 推定口径 13.3cm	キメ細かく緻密。	黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。外面体部斜め方向のヘラ削り。	43	11
13	土師器	高坏	現存器高 5.7cm 底径 9.8cm	キメ細かい。金雲母を含む。	暗茶色	良好	裾部横ナデ仕上げ。外面脚部縦方向のヘラ削り整形。内面脚部上半指頭による整形。	43	11
14	土師器	高坏	現存器高 5.6cm 底径 9.7cm	キメ細かい。金雲母を含む。	淡茶色	良好	裾部横ナデ仕上げ。外面脚部ヘラ削り後ナデ仕上げ。内面脚部横方向のハケ目。内面脚部上半に指頭圧痕あり。	43	11
15	土師器	長頸壺	器高 17.5cm 推定口径 8.0cm 底径 6.5cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面頸部から胴部にかけて横方向のヘラ磨き。	43	11
16	土師器	鉢	器高 9.0cm 口径 14.6cm 底径 7.8cm	キメ細かい。長石を含む。	赤褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	43	11
17	土師器	鉢	現存器高 8.5cm 推定口径 14.6cm	キメ細かい。長石を含む。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面口辺部の段下半に1cm幅後の斜め方向のハケ目あり。	43	11
18	土師器	把手付鉢	器高 9.5cm 口径 12.7cm 底径 3.5cm	石英・雲母を多く含む。	内面 黒茶色 外面 明茶褐色	良	内外面全体をナデ仕上げ。	43	11
19	土師器	坏	器高 5.6cm 口径 10.9cm 底径 5.6cm	長石・石英・雲母を含む。	淡茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部不規則なハケ目。外面体部粗雑な仕上げ。	43	11

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
20	上師器	坏	器高 4.1cm 推定口径 9.8cm 底径 6.1cm	キメ粗い。長石・石英を含む。	淡茶色	良	内外面休部横ナデ仕上げ。	43	11
21	土師器	坏	器高 4.1cm 口径 14.2cm 底径 6.5cm	長石・石英を含む。	淡褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。	43	11
22	須恵器	大甕	現存器高 27.6cm 推定口径 56.8cm	キメ細かく緻密。	淡灰茶色	良好	口辺部に段を持つ。口辺部横ナデ仕上げ。外面胴部叩き締めによる痕跡あり。内面胴部横ナデ仕上げ。	43	
23	須恵器	坏	器高 3.5cm 口径 10.6cm 底径 6.2cm	キメ細かく緻密。	灰白色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面休部下半に沈線が一周する。	44	11
24	灰釉陶器	段皿	器高 2.3cm 口径 11.0cm 底径 5.8cm	キメ細かく緻密。	淡黄灰色	良好	内面底部に線刻。内外面休部に施釉されている。口辺部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	44	11
25	須恵器	円面硯	現存器高 6.0cm 推定底径 18.5cm	キメ細かく緻密。	内面 暗灰色 外面 白灰色	良好	脚台部に透かし孔が空けられている。	44	11

第37表　谷状の落ち込み出土土製品

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	挿図	図版
26	土錘		現存長 3.3cm 現存軸 18.0cm	長石・石英を含む。	淡茶色	良	欠損のため形状が判別できないが、管状方向に直径0.2cmの円孔が穿たれている。	44	11
27	紡錘車		厚さ 2.9cm 直径 4.5cm	長石・石英を含む。	茶褐色	良	中心に直径0.6cmの円孔が穿たれている。	44	11

第38表　谷状の落ち込み出土石器

No	器種	計測値(cm) 最大長	最大幅	最大厚	石質	備考	挿図	図版
28	砥石	8.0	4.8	4.0	花崗岩	各面に研磨が見られる。	44	11

第39表　遺構外出土遺物

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	グリッド	挿図	図版
1	土師器	台付甕	現存器高 14.4cm 底径 9.6cm	長石・石英を含む。	暗茶褐色	良好	内外面胴部下半箇の方向のハケ目。内外両台部斜め方向のハケ目。	II－5	46	11
2	土師器	坩	器高 12.4cm 口径 8.2cm 底径 2.1cm	長石・雲母を含む。	赤褐色	良	内外面全体に朱が施されている。口辺部横ナデ仕上げ。	B－3	46	11
3	土師器	長胴甕	器高 35.1cm 口径 20.1cm 底径 6.2cm	長石を多く含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面頂部縦方向のハケ目。外面底部ナデ整形。	B 3	46	11
4	土師器	長胴甕	器高 33.9cm 口径 18.9cm 底径 8.5cm	長石を多く含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面口辺部から底部まで横方向のハケ目。内面底部指頭による整形。外面胴部縦方向のハケ目。	B－3	46	11
5	土師器	長胴甕	器高 31.1cm 口径 18.4cm 底径 7.5cm	長石・石英を含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面口辺部から底部まで横方向のハケ目。外面頂部から胴部上半に縦方向のハケ目。底部木葉痕。	A－5	46	11
6	土師器	甕	現存器高 19.8cm 底径 9.0cm	長石を多く含む。	明茶褐色	良好	内面胴部下半横方向のハケ目後、ヘラナデ仕上げ。外面胴部下半縦方向のハケ目。底部木葉痕。	I－1	46	12
7	土師器	甕	器高 24.9cm 口径 16.4cm 底径 6.6cm	長石・石英を含む。	暗茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。底部木葉痕。	A 6	46	12
8	土師器	壺	器高 23.4cm 口径 16.15cm 底径 7.1cm	長石を多く含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面頂部から胴部上半まで縦方向のハケ目。	B－3	46	12
9	土師器	壺	器高 20.9cm 口径 15.3cm 底径 7.9cm	長石・雲母を含む。	赤茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面頂部から底部まで縦方向のハケ目。外面底部ナデ整形。	B－4	47	
10	土師器	小型壺	器高 15.1cm 口径 14.2cm 底径 6.3cm	長石・石英を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面頂部から頸部上半に横方向のハケ目。外面胴部縦方向のハケ目。底部木葉痕。	B－3	47	12
11	土師器	小型甕	器高 14.3cm 口径 12.9cm 底径 5.4cm	長石・石英を含む。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部上半に横方向のハケ目。胴部下半に斜め方向のハケ目。底部木葉痕。	C 6	47	12
12	土師器	小型壺	器高 8.6cm 口径 8.0cm	長石・雲母を含む。	赤褐色	良	口辺部及び外面全体に朱が施されている。外面頸部に斜め方向の溝目。外面胴部に横方向の溝目。	B－4	47	12
13	土師器	甕	現存器高 8.1cm 口径 19.1cm	長石・石英を多く含む。	淡白茶色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面口辺部から肩部にかけて横方向のハケ目。外面頸部及び肩部に横方向のハケ目。	A－3	47	12

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	グリッド	挿図	図版
14	土師器	小型壺	器高 12.7cm 口径 12.8cm 底径 7.50cm	長石・石英・雲母を含む。	赤茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面口辺部横方向のハケ目。外面胴部斜め方向のハケ目。	B−4	47	12
15	土師器	甑	器高 11.8cm 推定口径 15.0cm 推定底径 3.6cm	長石・雲母を多く含む。	淡茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部上半縦方向のハケ目。底部に推定2.8cmの円孔を有す。	A−5	47	12
16	土師器	甑	現存器高 9.55cm 底径 3.6cm	長石・石英を含む。	茶褐色	良	底部に直径2.8cmの円孔を有す。	B−4	47	12
17	土師器	甑	器高 14.7cm 口径 16.8cm	長石・石英を含む。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部横方向のハケ目。外面胴部上半縦方向のハケ目。底部に推定2.5cmの円孔を有す。	D−11	47	12
18	土師器	鉢	現存器高 14.0cm 口径 20.3cm	長石を多く含む。	淡茶褐色	良	底部破損の為、甑とも思われる。口辺部横ナデ仕上げ。外面胴部上半に縦方向のハケ目。	A−6	47	12
19	土師器	鉢	現存器高 10.0cm 推定口径 16.2cm	キメ細かく緻密。	暗黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面体部横方向のヘラ磨き。	F−6	47	12
20	土師器	坏	器高 4.85cm 口径 12.5cm 底径 4.9cm	キメ細かく緻密。	明褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面ハケによる整形。外面体部横方向のヘラ磨き。	A−3	48	12
21	土師器	坏	器高 4.6cm 口径 11.8cm 底径 2.0cm	キメ細かく緻密。	暗茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部から底部にかけて横方向のヘラ磨き。外面底部ヘラ整形。	D−15	48	12
22	土師器	坏	器高 3.9cm 口径 14.3cm 底径 4.7cm	キメ細かく緻密。	淡赤褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面全体に朱が施されている。	A−5	48	12
23	須恵器	蓋	器高 4.8cm 口径 10.7cm 底径 4.5cm	キメ細かく緻密。	灰白色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部に一条の沈線が一周する。	B−15	48	12
24	須恵器	蓋	器高 4.05cm 口径 9.8cm 底径 4.7cm	長石・雲母を含む。	淡灰色	良好	外面底部に線刻有り。口辺部横ナデ仕上げ。外面底部及び体部下半ヘラ整形。	C−15	48	12
25	土師器	坏	器高 5.0cm 口径 10.0cm 底径 1.8cm	長石・石英を含む。	内面 黒色 外面 茶褐色	良	内黒土器。口辺部横ナデ仕上げ。	B−4	48	12
26	土師器	高坏	現存器高 6.4cm 推定口径 25.7cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。	A−3	48	12
27	土師器	高坏	現存器高 6.2cm 口径 16.3cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面坏部横方向のヘラ磨き。	A−3	48	12
28	土師器	高坏	現存器高 7.2cm 口径 24.7cm	キメ細かく緻密。	赤褐色	良好	内外面全体に朱が施されている。口辺部横ナデ仕上げ。内外面坏部横方向のヘラ磨き。	A−2	48	12
29	土師器	小型甕	器高 7.4cm 口径 9.2cm 底径 5.0cm	長石を多く含み、キメやや粗い。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面胴部上半に輪積痕。外面胴部縦方向の櫛目。	I−2	48	12
30	手捏ね土器	ミニチュア坏	器高 4.7cm 口径 5.0cm 底径 5.1cm	雲母・長石・石英を含む。	淡茶色	良	内面底部から体部にかけて指頭圧痕有り。	F−6	48	12
31	手捏ね土器	ミニチュア坏	器高 3.8cm 口径 5.0cm 底径 4.6cm	雲母・長石・石英を含む。	淡茶色	良	内面底部から体部にかけて指頭圧痕有り。	F−6	48	12
32	手捏ね土器	ミニチュア高坏	器高 6.8cm 口径 7.5cm 底径 5.2cm	長石を多く含み、キメやや粗い。	茶褐色	良	口辺部及び脚部横ナデ仕上げ。外面脚部縦方向のヘラ整形。	G−6	48	12
33	土師器	坏	器高 3.7cm 口径 13.3cm 底径 7.0cm	雲母・砂粒を多く含む。	内面 黒色 外面 茶褐色	良	内黒土器。口辺部横ナデ仕上げ。内面体部ヘラ整形。内面底部指頭によるナデ整形。底部木葉痕。	A−2	49	12
34	土師器	坏	器高 5.3cm 口径 10.8cm 底径 6.1cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	A−7	49	12
35	土師器	坏	推定器高 4.1cm 口径 11.6cm 底径 4.9cm	キメ細かい。	茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。内面体部放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	A−1	49	12
36	土師器	坏	推定器高 4.2cm 口径 10.6cm 底径 4.6cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	外面体部に刻書有り。口辺部横ナデ仕上げ。内面体部放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。	K−1	49	12
37	土師器	坏	推定器高 4.5cm 口径 10.4cm 底径 4.6cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	外面底部に墨書有り。口辺部横ナデ仕上げ。内面体部放射状暗文。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。底部糸切痕。	K−1	49	12・14
38	土師器	坏	器高 4.0cm 口径 12.1cm 底径 4.0cm	キメ細かく緻密。	明茶褐色	良好	外面体部に墨書有り。口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	B−1	49	12・14

No.	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	グリッド	遺構	図版
39	土師器	坏	器高 5.3cm 口径 14.8cm 底径 5.5cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面体部下半斜め方向のヘラ削り。外面底部ヘラ整形。	A－3	49	12
40	土師器	坏	器高 5.1cm 口径 12.8cm 底径 3.7cm	長石を多く含む。	明茶褐色	良	外面体部に正位で墨書有り。口辺部横ナデ仕上げ。外面底部ヘラ斜め方向のヘラ削り。	A 3	49	12・14
41	土師器	坏	推定底径 5.5cm	キメ細かく緻密。	淡茶色	良好	外面底部に墨書有り。外面底部糸切り後、ヘラ整形。内面ヘラ磨き。	4トレ西	49	14
42	土師器	坏	底径 4.9cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	外面底部に墨書有り。外面底部糸切り後、ヘラ整形。	K－1	49	14
43	土師器	坏	現存器高 4.1cm 推定口径 11.6cm	キメ細かく緻密。	茶褐色	良好	外面体部に倒位で墨書有り。口辺部横方向のヘラ磨き。内面体部殺方向のヘラ磨き。	C 4	49	14
44	土師器	坏	推定底径 3.0cm	キメ細かい。	淡茶色	良	外面底部に刻書あり。	B－4	49	14
45	土師器	皿	器高 2.8cm 口径 12.3cm 底径 4.6cm	長石・赤色粒子を含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部から体部にかけてヘラ削り。	A－3	49	12
46	土師器	皿	器高 2.15cm 口径 12.4cm 底径 8.0cm	赤色粒子を含む。	明茶褐色	良	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部ヘラ整形。底部糸切痕。	B－1	49	12
47	土師器	皿	器高 2.6cm 口径 12.5cm 底径 4.8cm	長石・石英を含む。	明茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。外面底部ヘラ整形。底部糸切痕。	A 1	49	12
48	土師器	皿	推定底径 5.4cm	長石・赤色粒子を含む。	淡茶褐色	良	外面底部に墨書有り。外面底部及び体部にかけてヘラ整形。	B－8	49	14
49	土師器	皿	推定底径 5.5cm	キメ細かく緻密。	淡茶褐色	良好	外面底部に墨書有り。外面底部及び体部にかけてヘラ整形。	K－1	49	14
50	土師質土器	坏	器高 5.6cm 口径 13.7cm 底径 6.1cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内外面口辺部に灯明スス付着。底部糸切痕。ロクロ右回転。	G－5	49	12
51	土師質土器	小皿	器高 2.5cm 口径 9.0cm 底径 5.0cm	金雲母を多く含む。	暗茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面口辺部に灯明スス付着。底部糸切痕。ロクロ右回転。	B 16	50	12
52	土師質土器	小皿	器高 2.4cm 口径 9.3cm 底径 3.8cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。内面底部に灯明スス付着。底部糸切痕。ロクロ右回転。	B 16	50	12
53	土師質土器	小皿	器高 2.3cm 口径 9.7cm 底径 4.7cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	A 3	50	12
54	土師質土器	格状高台皿	器高 4.4cm 口径 8.9cm 底径 4.6cm	金雲母を多く含む。	黒茶色	良好	口辺部横ナデ仕上げ。底部糸切痕。ロクロ右回転。	B 3	50	12
55	土師質土器	脚高高台皿	器高 3.4cm 口径 10.0cm 底径 5.9cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良好	口辺部及び高台部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	B－16	50	12
56	土師質土器	脚高高台坏	器高推定 4.65cm 口径 15.7cm 底径 7.8cm	金雲母を多く含む。	茶褐色	良好	口辺部及び高台部横ナデ仕上げ。ロクロ右回転。	F－6	50	12
57	土師器	羽釜	器高現存 24.0cm 推定口径 31.8cm	キメ細かい。	暗茶褐色	良好	口辺部ヘラ整形。内面口辺部横方向のヘラ磨き。外面胴部ヘラナデ仕上げ。	F－5	50	12
58	土師器	皿	器高 3.3cm 口径 15.0cm 底径 4.6cm	キメ細かく緻密。	内面 黒色 外面 淡茶褐色	良好	外面体部に倒位で墨書有り。内黒土器。内面中央に四弁花文、周囲に干鳥花弁が刻文されている。	A－1	50	13・14
59	灰釉陶器	碗	推定器高 4.7cm 推定口径 16.5cm 底径 7.8cm	キメ細かく緻密。	淡灰色	良好	口辺部及び高台部横ナデ仕上げ。	A－5	50	
60	須恵器	円面硯	現存器高 3.1cm 推定口径 17.8cm	キメ細かく緻密。	明灰色	良好	脚台部に透かしが空けられている。	F－1	50	13
61	須恵器	円面硯	現存器高 2.6cm	キメ細かく緻密。	内面 明灰色 外面 明茶褐色	良好	脚台部の透かしと思われる痕跡有り。	F－1	50	13
62	土師器	高坏	最大長 9.0cm 最大巾 4.0cm 最大厚 1.4cm	キメ細かく緻密。	暗黒茶褐色	良	脚部に多孔を有する高坏。	A－6	51	カラー図版
63	土師器	高台付坏	底径 7.0cm	キメ細い、赤色粒子。	明茶褐色	良		B－6	51	
64	土師器	高台付坏	底径 8.0cm	キメ細い、赤色粒子。	橙褐色	良		B 6	51	

No	器種	器形	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	グリッド	挿図	図版
65	土師質土器	柱状高台付坏	底径 7.0cm	金色雲母を多く含む。	暗茶褐色	良		一括	51	
66	白磁（X I 類？）	碗		キメ細かい、黒色粒子。	灰白色	良	大宰府編年の「白磁碗II類」の可能性あり。	一括	51	カラー図版
67	白磁（II類）	碗	推定底径 5.4cm	キメ細い。	黄灰色	生焼	大宰府編年の「白磁碗II類」に相当。	一括	51	カラー図版
68	青磁	碗		やや粗い。	灰色	良好	龍泉窯系統。	D－3	51	カラー図版
69	青磁	碗		やや粗い。	灰色	良好	龍泉窯系統。	一括	51	カラー図版
70	青磁	皿？		やや粗い。	灰色	良好		一括	51	カラー図版

No	器種	計測値（cm） 長軸	短軸	厚さ	素材	備考		挿図	図版
71	鋲釘	2.5	0.8	0.4	鋼		A－6	51	13
72	鋲釘	2.5	0.9	0.3	鋼		C－4	51	13
73	刺鉄	2.3	1.0	0.15	鋼		G－1	51	13
74	耳環	3.05	2.7	0.8	鉄	金メッキ部分有り。	2号住	51	13
75	不明鉄製品	4.6	3.0	0.15	鉄		A－3	51	
76	刀子	12.0	1.0	0.7	鉄		A'－17	51	
77	棒状鉄製品	10.7	0.85	0.9	鉄		B－5	51	
78	帯金具	5.45	3.6	0.8	鉄	1鉸具	10号住	51	カラー図版

第40表　遺構外出土の土製品

No	器種	計測値	胎土	色調	焼成	器形の特徴	グリッド	挿図
79	高坏型土製品	長軸 4.4cm 短軸 1.75cm	長石・石英を含む。	淡茶色	良	鍔状に整形された脚が一周する。それに沿って不規則な爪形文も一周する。	A－3	51
80	丸玉	長軸 2.05cm 最大径 1.95cm	長石・石英を含む。	黒茶色	良	下の中央に直径4㎜の円孔をもつ。	A－3	51
81	上錘	高さ 5.75cm 最大径 2.9cm	キメ粗く、長石を含む。	淡黒茶色	良	樽部に直径5㎜の円孔が穿たれている。	A－2	51
82	猪型土製品	長軸 6.0cm 現幅 3.1cm 厚さ 3.35cm	金雲母・石英を含み、キメ細かい。	明茶褐色	良	脚の接合部に指頭痕がみられる。	B－4	51
83	糸巻型上製品	上部最大径 6.7cm 下部最大径 6.8cm 最小径 2.9cm	長石を含み、キメ粗い。	淡茶色	良	指頭による粗雑な仕上げ。	F－6	51
84	羽口		長石・石英・赤色粒子を含む。	褐灰色	やや良	先端が溶融している。	G－7	51

第41表　遺構外出土の石器

No	器種	計測値（cm） 最大長	最大幅	最大厚	石質	備考	グリッド	挿図	図版
85	石鏃	2.2	1.7	0.5	黒曜石	有茎。	A－1	51	13
86	砥石	4.05	1.0		流紋岩		A－2	51	13
87	打製石斧	7.2	6.3	2.0	粘板岩		A－1	51	13
88	凹石	9.4	8.5	4.2	安山岩		B－1	51	13

第４章　松ノ尾遺跡出土の瓦の胎土分析

はじめに

松ノ尾遺跡は、荒川扇状地の扇央部に位置する集落遺跡である。本遺跡西方の台地は、黒富士火山の山麓斜面下部と荒川の河岸段丘面とから構成される。この台地上には白鳳期の天狗沢瓦窯跡があり、瓦・須恵器などの生産が発掘調査によって確認され、瓦の一部が胎土分析されている（河西、1990）。しかし、天狗沢瓦窯跡から生産された瓦の供給先については、現在のところ不明である。なお塩川の谷底平野「藤井平」に分布する菲崎市宮ノ前第２遺跡では、奈良時代の瓦が多量に出土し、胎土分析によってデイサイト・安山岩が多く塩川・荒川地域に産地が推定される瓦と花崗岩類が多く釜無川・荒川・塩川地域に産地が推定される瓦とが明らかになった（河西、1991）。今回松ノ尾遺跡の堆積層から瓦の破片が少数出土した。ここでは、瓦の胎土組成を明らかにし、村統遺跡や天狗沢瓦窯跡の分析結果との比較などによって瓦の産地推定を試みる。

試料および分析方法

土器試料は、凸面がナデにより器面調整され凹面は布目跡が残る丸瓦片である（第１・２図）。以下の方法で薄片を作製した。土器試料は、切断機で３×2.5cm程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片試料はエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の器壁に直交する断面切片を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に0.33㎜、短辺方向に0.40㎜とし、各薄片で2,000ポイントを計測する。計数対象は、粒径0.05㎜以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含める。

分析結果

分析結果を第１表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第３図に示す。重鉱物組成では右側に粒数を表示した。岩石組成折れ線グラフを第４図に示す。この折れ線グラフは、各岩石のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。クラスター分析の樹形図を第５図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の10種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第５図は、本遺跡試料のほか、村統遺跡出土瓦、天狗沢瓦窯跡、宮ノ前第２遺跡の胎土分析結果、および甲府盆地周辺地域の河川砂の岩石組成とを比較し、便宜的に１～14の番号をクラスターに付した。

粒子構成では、砂粒子の割合が16.8％で、赤褐色粒子が4.2％を示す。岩石鉱物組成では、斜長石が51％と卓越し、石英・カリ長石なども多く、変質火山岩類・デイサイト・花崗岩類などがこれに続く。デイサイトは、酸化角閃石・斜方輝石・斜長石の斑晶で石基はガラス質～細粒である。重鉱物組成では、酸化角閃石と不透明鉱物が多く単斜輝石・斜方輝石がわずかに検出された。第５図では村統遺跡№１・天狗沢瓦窯跡TNG-A・宮ノ前第２遺跡№15・貢川河川砂試料などとともにクラスター８を形成している。デイサイトの岩石学的特徴は黒富士火山を構成するデイサイトのそれと類似性が高く、酸化角閃石が優勢な重鉱物組成もこの地域の特徴と一致することから、本試料は在地的土器といえる。

瓦の産地推定

以上の分析結果で本遺跡出土瓦と天狗沢瓦窯跡TNG-Aとの類似性が認められることから天狗沢瓦窯跡で本遺跡瓦が生産された可能性が存在する。ただしTNG-Aを除く天狗沢瓦窯跡出土瓦の多くは、花崗岩類の優占率がより高率で、第４図では荒川河川砂試料とともにクラスター６を構成している。松ノ尾遺跡試料が、天狗沢瓦

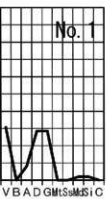
第1図　分析試料写真（凸面）

第2図　分析試料写真（凹面）

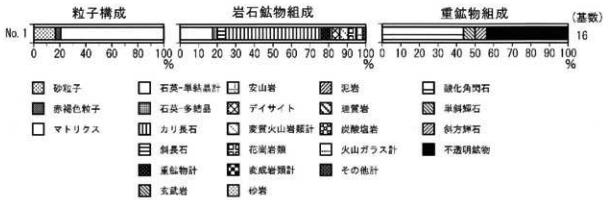
第1表　土器胎土中の岩石鉱物（数字はポイント数を、＋は計数以外の検出を示す）

試料番号	No. 1
石英-単結晶	55
石英-β型	4
石英-多結晶	8
カリ長石	15
斜長石	172
緑化角閃石	7
単斜輝石	1
斜方輝石	1
不透明鉱物	7
安山岩	4
デイサイト	14
変質火山岩類	15
花崗岩類	14
泥岩	1
珪質岩	1
火山ガラス-無色	10
変質岩石	2
変質鉱物	3
泥質ブロック	1
赤褐色粒子	83
マトリクス	1582
合計	2000
石英波動消光	+
パーサイト	+
安山岩の斑晶鉱物	opx
デイサイトの斑晶鉱物	oxy>ho, opx
変質火山岩類岩質	AD, D
マイクログラフィック組織	+
火山ガラス形態	B, C, D
植物珪酸体	+

記号：oxy＝斜方輝石、opx＝斜方輝石、変質火山岩類：AD型は岩質＝デイサイト質、D型は岩質＝流紋岩質、火山ガラス形態：B塊状、C中間型、D中間型繊状。

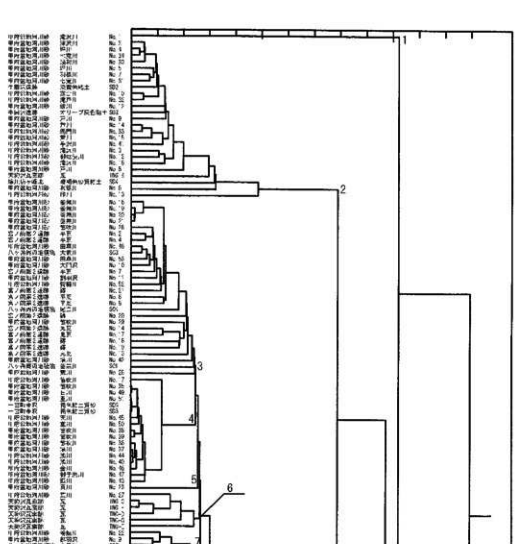


第4図　岩石組成折線グラフ



第3図　土器胎土の岩石鉱物組成

窯跡出土の典型的な胎土組成を示しているとはいえず、天狗沢瓦窯跡以外の生産地に由来してる可能性も低くない。また松ノ尾遺跡試料は、宮ノ前第2遺跡No15との類似性が認められる。宮ノ前第2遺跡では、多様な胎土組成の存在から周辺地質の複雑さによる原料組成の多様性かあるいは複数産地の存在の可能性などが指摘されている。№15を除く他の宮ノ前第2遺跡試料は、クラスター3およびクラスター11に集中する傾向があり、天狗沢瓦窯跡や松ノ尾遺跡試料とも区別される。以上のように黒富士火山周辺の荒川および塩川流域の古墳時代後期～平安期瓦を出土する遺跡における胎土分析結果からは、多様な産地の存在が考えられる。天狗沢瓦窯跡周辺の堆積物の定性分析において、荒川扇状地の堆積物№27には安山岩が検出されていない。しかし荒川扇状地上の村統遺跡などの地層中には安山岩の大礫・巨礫が普通に存在していることから、荒川扇状地の堆積物は、天狗沢瓦窯跡周辺の段丘堆積物と同様の岩石鉱物組成である可能性が高いと考えられる。従って荒川扇状地地域においても松ノ尾遺跡瓦の産地が存在する可能性も少なくない。



第５図　土器のクラスター分析樹形図

まとめ

松ノ尾遺跡出土瓦は、胎土組成が天狗沢瓦窯跡試料と類似することから、天狗沢瓦窯跡で生産された可能性が存在すること、しかしそれ以外の荒川扇状地周辺の生産地に由来してる可能性も低くないことが明らかになった。

（山梨文化財研究所　河西　学）

文　献

河西学（1990）岩石学的手法による天狗沢瓦窯跡瓦の胎土分析。『天狗沢瓦窯跡Ⅰ』、敷島町教育委員会、106-114。

河西学（1991）宮ノ前第２遺跡出土瓦の胎土分析。『宮ノ前第2遺跡・北宝地遺跡』、韮崎市教育委員会、84-90。

第5章　ま　と　め

1994年におこなわれた第Ⅰ次調査では、古墳時代後期（6世紀後半～7世紀初頭）と平安時代（10世紀前半～11世紀後半）の22軒の住居跡からなる集落跡が発見され、今回の第Ⅱ次調査でもさらに同時期の住居跡が多数発見された。

今回の松ノ尾遺跡第Ⅱ次調査で発見された各住居跡の時期と軒数については、以下のとおりとみられる。

弥生時代末葉	10号住居跡	1軒	奈良時代（8c後半）	8号住居跡	1軒
古墳時代（4c中～5c前半）	11号住居跡	1軒	平安時代（9c後半）	5号住居跡	1軒
古墳時代（6c前半）	7号住居跡	1軒	平安時代（10c後半）	1号住居跡	1軒
古墳時代（6c後半）	4・12・22号住居跡	3軒	平安時代（11c前半）	2・6・9・13・21号住	5軒
古墳時代（6c末～7c初頭）	18号住居跡	1軒	平安時代（不明）	3号住	1軒
古墳時代（7c前葉）	15・17・20号住居跡	3軒	時期不明	14号住	1軒
奈良時代（8c前半）	16・19号住居跡	2軒			計22軒

≪遺構について≫

●住居跡等の分布　弥生時代末葉は調査区中央南で1軒（10住）あり、今回の調査で初めて該期の遺構が発見された。

古墳時代（4c中～5c前半）では、調査区西側中央で後期の住居跡群とともに住居跡1軒（11住）が確認された。

古墳時代後期になると、住居が急増し計8軒が確認され、とくに調査区の西側では6軒が近接し重複している。

後期は上記でみるように4小期に分かれるとみられ、6世紀前半は旧河道跡南部に近接して1軒（7住）、6世紀後半には南部の旧河道と若干重複するものが1軒（4住）と調査区西側南半部の東西に2軒（12・22住）がある。

さらに、6世紀末～7世紀初頃は調査区西側北寄りに一辺約6.8mの大型住居跡（18住）が占地し、7世紀前半に調査区東側中央で3軒（15・17・20住）があるが、その後調査区内では次の奈良時代まで遺構は認められなくなる。

奈良時代になると3軒（8・16・19住）の住居跡が出現し、前半期の2軒（16・19住）は調査区中央西側にかけて東西にやや距離をおいて分布しており、後半期は調査区南部に1軒（8住）認められるだけとなる。

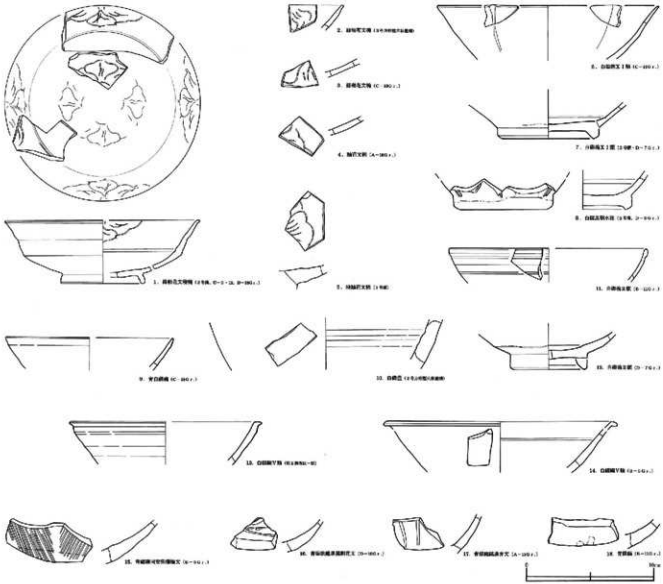
平安時代の前半期はかなり希薄なもので、9世紀後半において調査区北西部で1軒（5住）、10世紀後半では調査区北西部に1軒（1住）の状況である。しかし、後半期になると5軒の住居跡が出現し、調査区の南部を中心に4軒（2・9・13・21住）が東西に一定の間隔をもって展開するようになり、調査区の北西部でも1軒（6住）がある。

今回、本遺跡では初めてとなる2間×2間（約3.4×3.8m）で9本の総柱となる掘立柱建物跡が調査区西側のC・D－1・2グリッドにおいて発見された。遺物の出土が無かったため、時期は特定できないが11世紀前半の6号住居跡が隣接することから該期のものとは考えにくい。今回の調査成果では掘立柱建物跡と住居跡の軸方向、そして各時期の住居跡の分布状況からみて、古墳時代（6世紀後半）～奈良時代の所産ではないかと推測される。

●集落跡と旧河道跡の関係　調査区の北西側に砂礫を中心として多くの遺物が混在した旧河道跡が発見された。この河道跡は、7号住居跡に近接し3・4号住居跡と重複していたが、古墳時代後期の4号住居跡はすでに河跡の影響を受ける以前に埋没していたことが確認できている。一方、平安時代の3号住居跡は北西コーナーに砂礫を含んでいたことから、河道跡が形成されたのは少なくとも平安時代以降とみられる。しかし、3号住居跡の詳細な時期が不明であるため遺構の重複関係からは河道跡の形成時期は平安時代以降としか判断できなかった。

そのため、旧河道跡から出土した遺物をみてみたい。第36～40図にみるように縄文時代の石器をはじめとし古墳・奈良・平安時代の土師器、須恵器、陶磁器類などの遺物がみられる。これらの中で、最も新しいものには第37図24の土師質小皿、第37図25・26の土師質土器である柱状高台坏と柱状高台小皿、第37図27の白磁碗Ⅱ類などが含まれていた。このように、出土した遺物から判断すると旧河道跡の形成時期は12世紀以降と推測される。

第52図　松ノ尾遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区概要図



第53図　松ノ尾遺跡第Ⅰ次調査出土参考資料

≪主な出土遺物について≫

●**円面硯**　第Ⅰ次調査では脚を欠損した円形の磨面部（陸部と墨海となる部位）１点が出土したが、引き続き今回の第Ⅱ次調査においても磨面部と脚部（第43図－25、第49図－60・61）の計３点が出土している。脚部（第43図--25）は谷状の落込み南部上層から、ほか２点は遺構外の出土である。それぞれは別個体とみられ、第Ⅰ次調査出土のものを含め、これまでのところ計４点－４個体の円面硯がある。現在、本町内ではこの松ノ尾遺跡に限られ出土している。

●**ロクロ甕**　主に古代の巨麻郡域に分布し、須恵器の製作技術で作られた土師器甕がある。これは、粘土紐を輪積みして叩きの成形の後、ロクロにより器面を整形したもので、７世紀末に出現し９世紀後半には消滅するようである。

本遺跡では今回19号住居跡にロクロ甕があり、胴部最大径が約32.5cmを測り大型の球胴で丸底を呈する甕である。

類例として、韮崎市坂井堂ノ前遺跡４号住居跡出土のものがあり、時期的には８世紀前半に相当するとみられる。

●**高坏（いわゆる脚部が多面形を有するもの）**　脚部が縦位に面取りされ多角柱状を呈し精製された胎土を有する高坏が、Ａ－６グリッドから１点出土している。

この類の資料は、山梨県内で調査された一般的な集落跡ではほとんどみられないという傾向が指摘されている。現在、甲府市大坪遺跡、同市久保山遺々芽木遺跡、同市秋山氏館跡などの遺跡に限られる（大坪遺跡と久保山遺々芽木遺跡は隣接した遺跡）。また、本遺跡では遺構外からの出土であったため時期を捉えることはできなかったが、上記でみた各遺跡の出土傾向によれば、県内ではおおよそ９世紀代にその所属時期を求めることができそうである。

このような特徴をもつ高坏は、平城京などで高坏Ａと分類されているものに類似し、古くは奈良時代から出土がみられ、出土遺跡等が偏在することなどから「官衙・寺院等の限られた施設に供給されたことが予測され」ている。

●**緑釉陶器**　今回の調査では、いずれも破片であったが計10点の碗、稜碗などにあたる緑釉陶器片が出土している。

第Ⅰ次調査では緑釉陶器片27点以上が出土したが、器種には碗、稜碗がある。これら27点の内、碗と稜碗には陰刻花文が施されたものがみられ（第53図１～５）、今回の第Ⅱ次調査で出土した中にも、陰刻花文が施されたものが３片ある（巻頭カラー上段）。この内の１点は稜碗、ほか２点は別個体の碗の破片（内１点－輪花碗）であるが、第Ⅰ次調査出土の陰刻花文の緑釉陶器碗・稜碗のものとそれぞれ同一個体の口縁部破片ではないかと考えられる。

●**文字資料**　墨書と線刻による文字資料が多数出土したが、文字の明確なものを中心に計21点を掲載した。

墨書土器では、則天文字風の「𠦂」「𠦂」「𠦂」（２号溝、旧河道跡№13・19、遺構外№37・41・42・48・49）が最も多く出土している。この種の文字は、松ノ尾（第Ⅰ・Ⅲ次）、村統（第Ⅰ次）、御岳田（第Ⅰ・Ⅱ次）、金の尾（第Ⅴ次）などでみられ、本町では一般的な文字資料である。その他、「ヲ」（旧河道跡№５）、「卄ム」（旧河道跡№17）、「刑」（旧河道跡№21、）、「犯」（遺構外№40）、「隆」（遺構外№58）、判読不可（旧河道跡№６、№20、№22）などがある。これらの文字は、記された土器の特徴から時期的に９世紀代～10世紀前半に属するものとみられる。

刻書土器には、「上」（旧河道跡№18）、「余」（遺構外№43）、「丘」（遺構外№44）などの文字線刻があり、灰釉陶器皿（旧河道跡№24）の見込み部には記号線刻とみられる「卄十」（焼成前に線刻）と記されたものもある。

●**貿易陶磁器**　今回の調査で、計６点の磁器類が出土している（第37図－27、第51図－66～70）。内訳は、白磁碗Ⅺ類の口縁部１点（第51図－66）、白磁碗Ⅱ類の底部２点（第37図　27・第51図－67）、青磁鎬連弁文碗の口縁部１点（第51図－68）、同じく体部1点（第51図－69）、14世紀以降の青磁無文体部1点（第51図－70）である。

これらは、大宰府編年にみる磁器区分で白磁Ⅺ類がＢ期（10世紀後半～11世紀前半）、白磁Ⅱ類がＣ期（11世紀後半～12世紀後半）、青磁はＥ・Ｆ期（13世紀～14世紀）にそれぞれ相当する。

このような貿易陶磁器は、第Ⅰ次調査でも確認されており、いずれも破片であったが白磁碗（Ⅺ類－２点、Ⅱ類－２点、Ⅴ類・２点）、白磁小注（瓜割り型・底部１点）、白磁壺（四耳壺か？－１点）などや青白磁碗－１点、青磁碗（同安窯櫛描文－１点、龍泉窯劃花文・１点、鎬蓮弁文－１点、無文－１点）など計13点がある（第53図６～18）。

この内、第Ⅰ次と第Ⅱ次調査出土の白磁碗Ⅺ類とⅡ類には同一個体とみられるものがある（通常、遺跡内で出土する量は稀なことから、Ⅺ類は第51図66と第53図６、Ⅱ類は第37図－27と第53図－11が同一のものと思われる）。

これらの中国産の磁器類は、今回の調査ではとくに遺構に伴うものはみられなかったが、中でも、白磁と青白磁のものについてはこれまで発見されている11・12世紀代の遺構や遺物に伴ってくるものと考えられる。しかし、当時としては調度品であるこれらのものが量的にもまとまった状態で出土している背景にはいかなる理由があるのか、今後の調査で注視すべき点であろう。

●瓦　男瓦２点、女瓦１点が出土した。男瓦（遺構外№89）は、試掘調査時にA－８グリッドからの出土である。粘土板づくりの粘土円筒による２分割で製作され、分割後、側面はヘラ削りによる調整がおこなわれている。凸面部は叩き後、横ないし縦方向にナデをおこない叩き目が消されている。大きさは、長さ18.5cm、幅7.4cm、厚さ1.5cmを測る。男瓦（遺構外№62）はB－７グリッド、女瓦（遺構外№63）はB－５グリッドから出土した。

３点の瓦はいずれも出土した地点が、旧河道跡の範囲に近接ないし含まれていた。また、本調査区内では瓦を使用した建物跡の痕跡は見当たらなかったことから、３点の瓦はおそらく調査区外の北東部から荒川の氾濫とみられる旧河道の影響で流され運ばれてきたものと推測される。

●腰帯　鉄製の鈴具１点が出土した。本遺跡では第Ⅰ次調査につづき２例目となった。第Ⅰ次調査では鈴具以外にも銅製の蛇尾１点が出土している。県内の出土例として、長坂町柳坪遺跡の19号住居跡から鉄製の鈴具が１点出ている。

最後に、本遺跡の調査も平成16年現在では第Ⅻ次調査を数えるまでとなり、縄文時代から中世にかけて長期に複合した遺跡であったことが明らかとなってきている。中でも、主要な時期は古墳時代後期（６世紀後半）から平安時代末葉（12世紀代）にかけてであり、時期ごとに大きな分布の偏在傾向が窺えるため、以下概観しておきたい。

愛宕町下条線の第Ⅰ次調査と今回の第Ⅱ次調査の本遺跡中央では、古墳時代後期（主に６世紀後半～７世紀前半）にあたる遺構や遺物が集中してみられ、粗密はあるが該期の遺構は松尾神社の西側周辺の遺跡北部地域（第Ⅶ・Ⅸ・Ⅻ次調査）や宝珠寺南西の遺跡南西地域（第Ⅳ次調査）まで及んでおり、この時期に大きな集落跡が形成されている。

古墳時代末葉（７世紀後半）から平安時代初頭（９世紀前半）では、現在のところ遺構はまだ少なく本遺跡の空白時期という感は否めない。今回の第Ⅱ次調査では、本町でまだ発見例の無かった奈良時代の住居跡が３軒も発見されたことは大きな成果であったといえる。また、平成10年の第Ⅳ次調査では遺構の発見には至っていないが８世紀中頃の坏や蓋坏などがあり、破片資料であったが本遺跡では初例となる仏教関連遺物の長頸壺「罐G」などもある。

平安時代前半（９～10世紀代）では第Ⅰ次調査区周辺から遺跡南側地域（第Ⅲ次）にかけて検出されてきている。

このような傾向から、８～10世紀代には愛宕町下条線から遺跡南側地域において今後検出される可能性が高い。

平安時代後半（11～12世紀代）は、今回の第Ⅱ調査区周辺から遺跡北側（第Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅺ・Ⅻ次調査）にかけての広い範囲で分布する。この頃、住居軒数が急激に増加する傾向が窺え、遺物は完形品に近い状態で脚高高台坏・皿、柱状高台坏、小皿、坏、小埦、羽釜など、多くの土器類が出土している。また、当時としては調度品であった貿易陶磁器の白磁や青白磁、青磁などの碗・皿・水注・壺類などが伴うほか、小金銅仏２軀（第Ⅰ次調査）を保有するような富裕な集落跡が形成されていることが窺える。なお、近年の遺跡北部の第Ⅶ次調査で11～12世紀代の方形を呈する溝跡や、第Ⅸ次調査では11世紀代のL字を呈する区画溝などがピット群とともに発見されてきており、出土遺物の内容なども勘案すると該期の「館跡」などが存在する可能性もある。

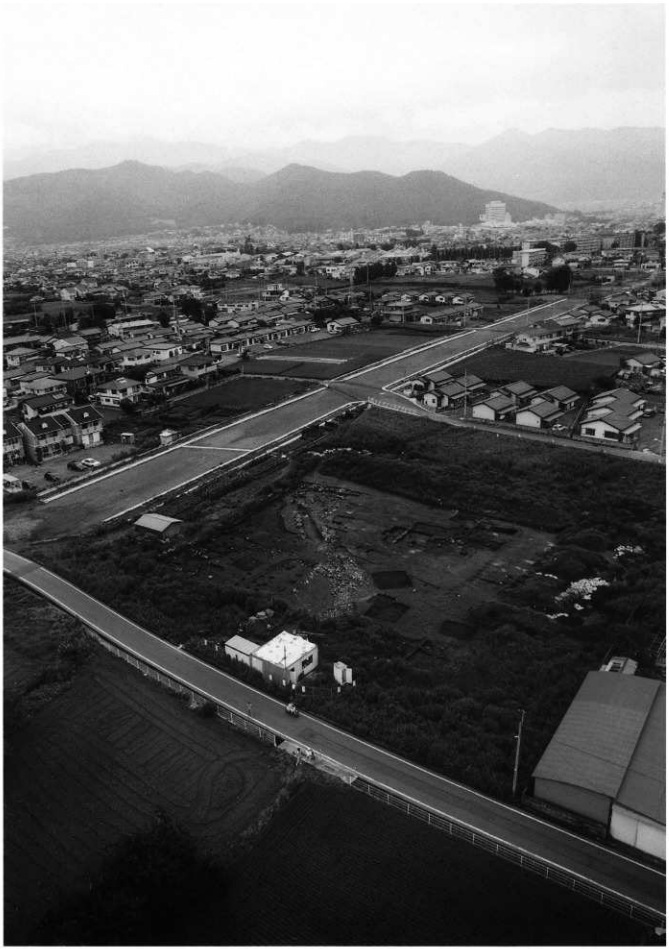
本遺跡はこれまでの調査からおよそ以上のような時期的傾向が窺える。しかし、まだ調査の及んでいない地域もかなりある（とくに遺跡の南部地域）ため、現在希薄な時期は今後新たな資料が追加される可能性がまだ十分にある。

以上のように、本遺跡は周辺地域の歴史解明において欠くことのできない長期にわたって継続する拠点的な集落遺跡であることから、今後も鋭意調査に努めていきたい。

引用・参考文献　末木　健　1990『天狗沢瓦窯跡』敷島町教育委員会調査報告
大嶌正之　1996『松ノ尾遺跡』敷島町文化財調査報告第５集
瀬田正明・山下孝司　「５　奈良・平安時代の編年」1998『山梨県史　資料編２』山梨県
石神孝子「第１章　道具としての遺物―装身具」1998『山梨県史　資料編２』山梨県
末木　健「第６章　律令体制と牧・寺院―（５）服帯」1998『山梨県史　資料編２』山梨県
佐々木　満　2001『秋山氏館跡』甲府市文化財調査報告16
鵜原功一他　2002『大坪遺跡』大坪遺跡発掘調査会
森原明廣　2002『久保田・道々芽木遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第197集
山下孝司　2004「第9章　第二節　生産と流通」『山梨県史　通史編１　原始・古代』山梨県

写真図版

図版1



調査区全景

1．10号住居跡

2．10号住居跡貯蔵穴

3．4号住居跡

4．7号住居跡

5．11号住居跡

6．12号住居跡

7．18号住居跡

8．18号住居跡カマド

図版3

1．15号住居跡

2．20号住居跡

3．22号住居跡カマド

4．16号住居跡

5．8号住居跡

6．8号住居跡カマド

7．19号住居跡

8．1号住居跡

1．2号住居跡

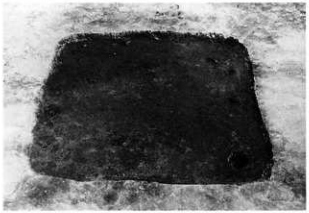
2．3号住居跡

3．5号住居跡

4．6号住居跡

5．9号住居跡

6．9号住居跡カマド



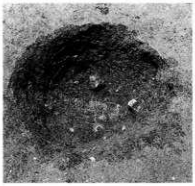
7．13号住居跡

8．14号住居跡

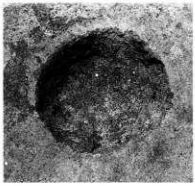
図版5

1．掘立柱建物跡

2．25号ピット内出土遺物

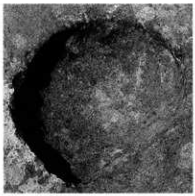


3．1号土坑



4．2号土坑

5．3号土坑



6．4号土坑

7．5号土坑

8．6号土坑

9．9号土坑

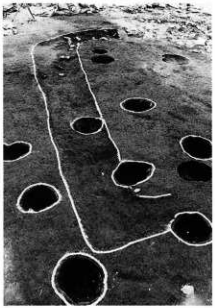
10．10号土坑

11．11号土坑

1．12号土坑

2．13号土坑

3．1号溝状遺構



4．2号溝状遺構

5．3号溝状遺構

6．4号溝状遺構

7．5号溝状遺構

8．6号溝状遺構

図版7

10住－1

10住－2

10住－3

10住－4

4住－1～4

4住－5～7

4住－8・9

4住－10

4住－11

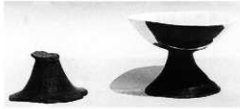
4住－12

11住－1

7住－1

7住－3

7住－2


11住－2・3

15住－1・2

17住－1・2

12住－1

12住－2

12住－3

17住－4・5

17住－3

18住－1～4

18住－5・6

18住－9

18住－7・8

20住－1

20住－6・7

22住－1・2

18住－10・11

18住－12・13

18住－14・15

20住－2・3

20住－4・5

8住－1・2・3・5

8住－8

8住－9

図版9

16住－1

16住－2

16住－3

19住－1

19住－2

1住－1～3

2住－1～3

2住－4

3住－1

5住－1・2

6住－1

9住－12・13

9住－1～11

9住－14～17

13住－1・2

21住－2～6

21住－1

21住－7

14住－1

9号土坑出土遺物

12土－1

12土－2

12土－3

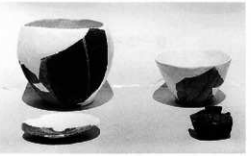
12土－4・5

25号ピット1～3

河－1～3

河－28～34

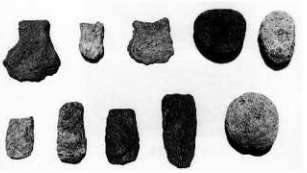
河－4・5・7



河－35～38

河－8・9・11～16・19

河－39～50



河－51～60

遺構内出土遺物（4）・河跡出土遺物

図版11

谷－61・63（表）

谷－61・63（裏）

谷－1・2

谷－4～8

谷－11～14

谷－15・18

谷－16・17

谷－19・20・21・23・24

谷－24

谷－25～28

谷状遺構出土遺物
遺構外出土遺物（1）

遺外－1

遺外－2

遺外－3～5

遺外－6～8

遺外－10・11

遺外－12・14

遺外－13

遺外－15～17

遺外－18

遺外－19

遺外－20～22

遺外－23・24

遺外－25

遺外－26～28

遺外－29～32

遺外－33～40

遺構外出土遺物（2）

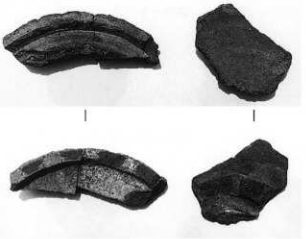
図版13

遺外－45～47

遺外－50～56

遺外－57

遺外－58



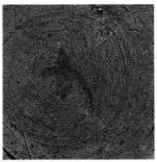
遺外－60・61

遺外－79～88

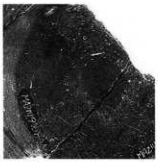
遺外－74

遺外－71～73

遺構外出土遺物（3）


河－5

河－6


河－13

河－17

河－19

河－20

河－21

河－22

遺外－37

遺外－38

遺外－40

遺外－41

遺外－42

遺外－48

遺外－49

遺外－58

河－18

河－23

遺外－43

遺外－44

墨書・線刻土器

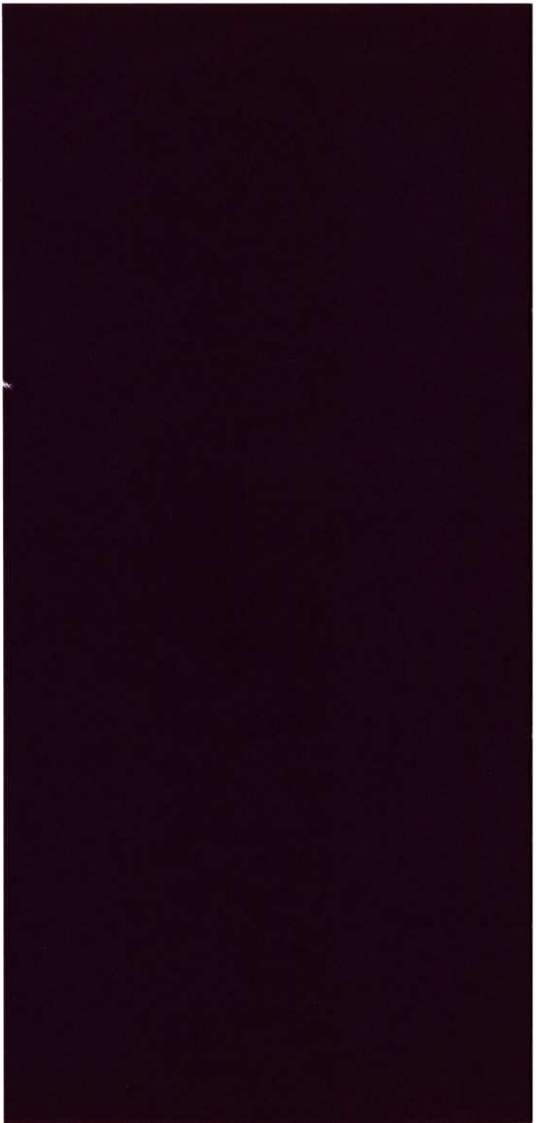
報告書抄録

ふりがな	まつのおいせき
書名	松ノ尾遺跡 Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書
シリーズ番号	26
編著者名	大嶋正之・小坂隆司
編集機関	敷島町教育委員会
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
発行年月日	平成16年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まつのおいせき 松ノ尾遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町大下条631	193928	18			平成9年 4月2日 ～ 平成9年 9月9日	2,000	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松ノ尾遺跡	集落跡	古墳時代 ～ 平安時代	竪穴遺構土坑 溝状遺構	土師器 石器	

敷島町文化財調査報告 第26集

松ノ尾遺跡 Ⅱ

発行日 2004年（H16）8月31日
発行 敷島町教育委員会
山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
TEL（055）277－4111
印刷 株式会社 少国民社